【優しい魔法の使い方】

cocotte

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【優しい魔法の使い方】

【Ｎコード】
Ｎ５１４９Ｚ

【作者名】
ｃｏｃｏｔｔｅ

【あらすじ】
ホンワカのほほんなファンタジーを目指した初小説です。
依頼された物を修理するのが仕事の
過去に心に傷を負った青年と
その青年を支えることになった女の子のお話です。

第一話　【出会い】（前書き）

諸注意・・・。

作者は小説の経験がすごく浅いです。
未熟者ですので、ストーリーの出来や文章力など至らない点は多々あると思います。

更新も遅いと思いますがどうか長い目で見守っていただけたらと思います。

誹謗中傷はどうか御遠慮ください。

感想はとても大きな力になります！

こんな未熟な話でも感想をくださるのなら泣いて喜ぶ勢いです。

読んでくださる方に楽しんで頂けるお話を執筆できるよう頑張りたいと思います。

どうかよろしくお願いいたします。

第一話　【出会い】

この世界は、多くの職人が工房を連ねる世界。
数百といった職人が世界中に生き
芸術、食品、機械や、医薬の職人など数知れず。職人の作るあらゆる物が
この世界の人々の生活を支えているといっても過言ではないだろう。

そしてこの職人は、２つに分けることが出来る。
魔法士である職人と、そうでない職人。

かつてこの世界には魔法が存在していた。
しかし強大な魔力に魅了された人間により、魔力を利用しようと
人間が魔法士を欺こうとしたことで戦争が起こり
多くの犠牲者が出たことで、世界は魔法士の大半を失ってしまった。

終戦した後、魔法士である職人は、希少価値のある存在となりその中には
魔法士であることを隠し、魔法の使えない職人として、己を偽り生きているもの。

国の王の下に就くことで地位と名誉を手に入れた魔法士職人など。
様々な方法で今も生き続けている。

この話は、そんな世界で生きている

少し変わった職で、小さな工房をもつ物静かな１人の青年と
そのパートナーとなった、落ちこぼれな少女の物語。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ここはとある世界最大規模の学園。
世界の職人の片腕を育てる学園。

数百の講師が様々な分野の職のアシスタントを育て上げるのがこの
職人アシスタント育成学園。
人間が魔法士の魔力を真似て生み出した【レプリカ魔法】を学び
魔法士職人という希少な職人の片腕になろうと学ぶ生徒もいれば
魔法の使えない職人を支えていけるように、己の目指す職人の業を
学ぶ生徒もいる。

３年に一度、世界中の職人から学園に職人の片腕の求人募集が来る。
名のある職人に片腕志望が集中した場合は、学園にてオーディショ
ンが開催される。

しかし、学園の卒業試験に受かることが出来なければ、求人に応募
することが出来ない。
しかし卒業試験はどの学年でも受ける権利があり
才能のあるものはたった１年で卒業試験に合格出来る優秀な者もい
る。

求人募集が全て埋まるまでに卒業試験に受かれなければ再び求人の

くる3年間、生徒は待たなければいけなくなるのだ。

この話のヒロインとなる少女は、この学園で5度の卒業再試験を受けてようやく卒業できた劣等生。

名前は【シーナ】。１６歳。

今日はようやく手に入れた卒業試験合格証明書を手に入れて

急いで進路室にシーナは向かっていた。

「テイラー先生！やりました、ようやく受かりました！合格できました」

乱暴に進路室のドアを開け、息を切らせてシーナは進路室へ飛び込んだ。

進路室には1つの大きなデスクがあり、テイラーという進路指導の先生が求人書類の管理を行っている。

「待ってたよ、お前にいい知らせがある」

そう言うとテイラーはある1枚の書類を取り出した。

「まさか、求人まだ残ってるんですか！？」

「あぁ、この1つだけな。誰も求人に行こうとしなかったんだよ」

「そんな、なんて勿体ないことを。見せてくださいよ！」

シーナはその書類をテイラーから受け取る。

するとテイラーは大きなため息をつく。

「お前なぁ、何が勿体ないだ。この学園にくる生徒たちは皆目指す職人の片腕っていう目標があるんだよ。

どこでもいいなんて言う奴はお前くらいなんだからな」

「先生、人聞きの悪いことおっしゃらないで下さいな。私はオールラウンダーなんですよ」

「よく言うよ卒験5度も落ちたやつが。何でもかんでも向いてない向いてないと言い続けて、ようやくアシスタントの基礎力を身につけられたんだろう？」

「先生？物をくっ付けたり、磨いたり、レプリカ魔法陣覚えたりするのだって立派な才能でしょう？」

書類の内容に目を通しながら、しっかり言葉を返すシーナに再び大きなため息をつくテイラー。

「普通はみんなそれ以上を目指して卒業していくんだよ。お前には目指したり身につけたい独特の個性がないじゃないか。

テストだけ合格して。どんな職人のアシスタントになりたいのか全く分からん。そんな状態でよく進路志望室に来れたものだ。」

ぶつぶつとテイラーが呟いている間に、シーナはようやく書類を読み終えた。

「カームタウンの・・よろづ修理工房。修理って・・・職人なんですか？」

「この世界における職人は生み出してなんぼ。なのにこの工房はなぜか修理人なのに職人を名乗っている変な工房だ。
　誰も興味を持たなかった。しかし・・。お前のような何の個性もない者にはぴったりな工房だ。
　お前の基礎しかない力でも役に立つかもしれないぞ？どうする」

シーナは目を輝かせて首を縦に振った。

「行きます！務めます！私この工房で働きます！！」

「よし、決まりだな！」

テイラーは書類に大きなハンコを押した。

シーナの就職先の決まった瞬間だった。

そして、条件も学園卒業のみと書かれてあり、志望者もシーナ１人な為、学園からすぐに手続きが行われ、三日後には出発日も決まった。

「よろず修理工房なんて、聞いたことないわよ？」

学園寮の同室のクラスメイトにシーナは就職先が決まった事を話していた。

「私もない！でも、私が人気のある職人の片腕のオーディション受けたって永久に受かる気しないんだもん…。だから行くの！」

「不純な動機ねぇ。明日には出発なのよ？大丈夫なの？」

「大丈夫よ！きっと楽しいわ」

「心配だなぁ…何かあったら手紙書いてね。なくても書くのよ？」

シーナのクラスメイト、マカは、有名な菓子職人の片腕のオーディションに見事合格し就職先が決まっていた。

「うん！絶対手紙書くから！マカも頑張ってね…うぅっ」

「やだ泣かないでよ、我慢してたのにぃ」

どちらともなく2人とも寮で過ごす最後の夜に大号泣してしまった。

「頑張るんだよ、シーナ」

「ありがとうマカー！」

こうしてワンワン泣き喚く声が部屋中響く騒がしい夜が過ぎていった。

夜が明け、出発当日。

就職先の決まった卒業生は大きな列車に乗り、各々の就職先に向かう。

大都会や小さな田舎など就職先は様々である。

「カームタウンってどんな街だろう」

「ん～？あぁ、ものすごい田舎じゃない。行ったことないわよこんな遠くで小さな街。」

シーナとモカは列車に隣同士で乗車していた。
シーナは地図から目を離せずにいる。

「私もこんな遠くに行くの初めてだよ。でも治安いいみたいだし」

「いいじゃない、平和が一番よ。私の行く街も平和で賑やかみたいだし。まぁ、シーナの行く街よりは都会だけどね」

「そうなんだ、いいなぁ。」

そしてマカの目的地の駅に、列車が先に到着した。

「それじゃあね、シーナ。頑張ってね」

「うん、またねマカ！」

次々に生徒が列車を降りていき、ついに列車にはシーナ1人になっ

ていた。
だんだん外の景色にも緑が増えてきて、ビルなどの建物が少なくなってきていた。
「随分田舎なんだなぁ。」
列車は鉄橋で海へ出た。
それから数十分後、小さな島の駅に到着した。
駅には「ようこそカームタウンへ」と横段幕が張られていた。
列車を降りたシーナは大きく深呼吸をして、駆け足で駅を出た。
すると、赤煉瓦の屋根の可愛らしい民家が密集して並んでいた。
世間話などで笑いあう町民達に目配せをしながら、シーナは住宅区を抜けていく。
住宅区を抜け、大通りに出ると、今度はパン屋や花屋、鍛冶屋などがズラリと並ぶ商業区に出た。
小さな街だが町民があちらこちらを行き交い、賑やかな雰囲気の街である事が分かってきてシーナは密かに心踊っていた。
その先にの広場を抜けると、また住宅区が見え、その先は緑豊かな丘があった。

「地図だと…この先なのよね。」
広場の椅子に座り、地図を確認する。
すると眺めていた地図が影で覆われた。
シーナが顔を上げると、1人の女性が立っていた。
「もしかして、あなた職人の片腕に来てくれた人？」
女性はにこりと微笑んで訊ねた。
「は…はい！シーナと申します」
シーナは慌てて地図をしまい立ち上がった。
「ようこそ、カームタウンへ。工房はあの丘のうえよ。ついてきて」
そう言って、歩いていく女性にシーナは黙ってついていった。
丘を登ること数分。
白い柵に囲まれた工房と思われる建物と、赤煉瓦の小さな家の前に着いた。
木製の看板には『よろず修理工房』と確かに書かれていた。
「待ってて、今呼んでくるから」

シーナを、柵の外に待たせ、女性は家に向かう。

「トッド、出てきて。アシスタントさんがいらっしゃったわよ！」

ドアをノックして大きな声で呼ぶと、ゆっくり扉が開き、1人の青年が出てきた。

シーナは、はっと息を呑む。

ゆったりとしたパーカーとズボンに身を包み、肩に届くか届かないほどの焦げ茶色のボサボサした髪。

少し垂れ気味の目からは穏やかそうな性格が伺える。

「こんにちはリリィさん」

「こんにちは。来てくれたわよ、アシスタントさん」

「あぁ、そっか。来てくれたんだ」

シーナは青年と目が合った。緊張から、思わず直視できず俯いてしまった。

青年はゆっくり柵の外にいるシーナに近づき、目の前まで近づいた。

「初めまして。君の名前は？」

シーナはゆっくり顔を上げる。

「シ…シーナです。１６歳です」

「そう、シーナ。僕はトッド、１８歳。この工房で町民の日用品や耕具の修理をしています。よろしく」

トッドから握手を求める手が差し出された。

「よろしくお願いします！」

シーナはその手を両手でしっかりと握った。

「じゃあ、私はこの辺で」

「ありがとうリリィさん」

「案内してくれて、ありがとうございました！」

先ほど案内してくれた女性、リリィがトッドへの挨拶を終えると、丘を下っていった。

「さぁ、中へどうぞ。長旅で疲れたでしょう。お茶でも飲んで話しましょうか」

トッドに導かれてシーナは部屋へと入った。

木製のテーブル、椅子に衣裳棚。

必要最低限の家具が揃えてある家だった。

トッドはお茶の準備をしながら、リビングの椅子に座ったシーナに優しく話し掛ける。

「先日、そちらの学校の学長が挨拶に来てくださいました。卒業試験に合格されて、喜びも一入だったでしょう？なのに、僕の所なんかで本当によかったの？」
お茶の用意が出来て、シーナと向かい合うようにトッドも席に着いた。

「いえ、ここがよかったんです！」

「ここが？どうして」

トッドはきょとんと首をかしげる。

「だってここしか求人が残って…あ…」

失言と思いシーナは口をつぐみ俯く。
怒られると思った。

するとトッドから笑い声が聞こえる。

「ハハハ、やっぱり。もっと職人らしい職人がいる工房に行きたかったんだよね。」

「……」

「本当はね、求人も出すつもり無かったんだよ。僕は職人って名乗れるような仕事してないから。それでも、リリィさんが修理職人と

僕に名乗らせて求人を募集してくれたんだ。」
確かにテイラー先生も言っていた。
生み出してなんぼの職人なのに変だと。
リリィとは、先ほど案内してくれた女性の事だろうか。

「リリィさんって？」
「あぁ、さっき君をここまで案内してた人だよ。この工房もリリィさんが提供してくれて。僕がこの街に来た時からとてもよくしてくれてる人なんだ。」
「いい人ですよね！リリィさん！」
シーナはまるで子どものようにはしゃいだ。
この街で初めて優しく声をかけてくれ親切にしてくれた人の事だったからだ。

「うん、とってもいい人だよ。それで、シーナ。君はどうしたい？無理にとは僕は言わないし、別に行きたい工房があるなら僕も探すの協力するよ？」
「いいえ？その必要はありません。私みたいな落ちこぼれ…どこも雇ってなんかくれません。それに、私は今まさに運命を感じているんです！」

シーナは即答だった。
もう迷いはなかったのだから。
運命も感じていた。

「運命？」

「ここで会ったも何かの縁！私シーナ、全身全霊でアシスタントします！」

シーナのテンションの高さに驚きながらもトッドは優しく微笑んだ。

「そう。君がいいなら僕は大歓迎だよ。これからよろしくね」

「よろしくお願いします！」

2人の生活が始まったのであった。

第二話　【魔法の使用禁止！？】（前書き）

第2話です。

2人の関係をゆっくり近づけていけたらなと思っています。

まだまだ未熟ですが、気軽に読んでいただ行けたら幸いです。

第二話　【魔法の使用禁止！？】

シーナとトッドの共同生活が始まった初日。
シーナはウキウキしながらトッドと共に工房へ向かった。

「どうぞ。ここが工房です。リリィさんに空き家を譲ってもらって、デスクや必要な道具や書物の本棚とか揃えてもらいました。」

工房は白石の壁で出来たもので、窓から柔らかい日が射している。
部屋の隅には1人用のデスクがあり、工具や裁縫セット、設計図の様な図面の描かれた紙の束が乱雑に置かれていた。
部屋の中央には木製の長机が置かれてあり、沢山の付箋の貼られた本が、これも同じく乱雑に置かれていた。

職人の工房を初めて目の当たりにしたシーナは、キョロキョロと辺りを見回していた。

「散らかっていてすいません。僕、掃除があまり得意じゃなくて」

トッドは隣で苦笑する。

シーナはぶんぶんと首を横に振り、目をキラキラと輝かせてトッドに詰め寄った。

「ねぇトッド？私は何をすればいいんですか？どんなお手伝いを？」

「えっと、日頃は主に…家事をお願いしたいんですが…。」
トッドは頭を掻きながら苦笑混じりにつぶやいた。

「家事？」

シーナはガクンと肩の力が抜けると、トッドから一歩引いた。
「えぇ、家事。僕は主に町民の耕具や日用品の修理で、1人で事足りるのですが…どうも家事に手が回らなくて困っていたんです。」
「私…まさか家政婦として呼ばれたんですか…？」
先ほどまであんなに、はしゃいで笑顔を見せていたシーナが一変。
今にも泣きそうな表情で訴えるシーナにトッドはギョッとして、慌てて言葉を訂正する。
「いえいえ、もちろん本職のお手伝いもしてもらいたいんだけど、今は1人で事足りるので。その間は家事を…」
だめですか？と申し訳なさそうにシーナの顔を覗き込む。
「わ…分かりました！シーナ、一生懸命頑張ります！」
しばらく、しょんぼりしていたシーナも、笑顔を取り戻し、トッドにガッツポーズをみせる。
「助かります。じゃあ、早速晩ご飯を。ダイニングに1日の予算が

書いてありますので街に買い物に出てもらえますか？メニューはお任せします。」

「お料理ですね！任せてくださいシーナのレプリカ魔法で」

「ちょっと待った！」

シーナが意気揚々と魔法をかける素振りを見せると、急にトッドに制止される。

「はい？」

「ここでは家事におけるレプリカ魔法の使用は禁止。」

「えぇ！？」

トッドはおもむろにシーナと向かい合い自分の胸を押さえゆっくり話しだす。

「ここの問題です。分かるかな」

「心？」

トッドは優しく微笑んで頷いた。

「この世界で、職人が使う魔法は、職人自身の為の魔法じゃない。
手で作業するより楽をするために魔法を使うような職人に、有名な人なんて誰もいない。

不思議なんだけどね。絶対敵わないんだよ、魔法を使って楽して作った職人の生み出したモノは。
魔法が使えない職人の、丹精込めたモノには敵わない。
素敵なことだと思いません？魔法が使えたって使えなくたって、生み出したモノの価値は同じなんだよ？
自分の為じゃなく、誰かの為に込めた思いが同じだから」

「・・・・・」

「だから、僕は魔法を自分の為には、使ってほしくない。
僕なんて職人なんて名乗れないかもしれないけど、気持ちは一緒だから。
それに、職人の片腕を目指して、５度も頑張って試験を受けた君には尚更・・・
例えレプリカでも、魔法を楽するために使ってほしくないんだ。
分かってくれませんか？」

俯くシーナに心配そうにトッドは問いかけた。

「・・・・」

しばらくトッドが声をかけられずにいると
シーナはすっと顔をあげて、ニコリと笑ってみせた。

「分かりました！私、自分の楽の為に魔法は使いません！約束します」

「本当ですか？」

「えぇ、約束します！じゃあ私、早速買い出しに行ってきますね！」

シーナは元気よく工房を飛び出していった。
トッドはシーナの表情に笑顔が戻ったことに安心し、
工房のデスクに座り、修理の作業を始めた。

シーナは商業区まで降りてきて、トッドがダイニングに置いていた
予算を握りしめ
晩御飯のメニューを考えていた。
「弱ったなぁ・・・」
シーナは内心とても焦っていた。
寮生活時代は料理はマカに任せきりだったせいで
実際に料理をしたことが無かったのだ。
「どうしよ、とにかく野菜と・・お肉とで・・」
シーナは予算であるだけの野菜と肉を購入。
「お嬢ちゃん見ない顔だね、どっから来たんだい？」
肉屋の店主に声をかけられた。

「お・・丘の上の、トッドさんのアシスタントで今日からこの街に」
頬を赤らめてそう伝えると店主は急に笑った。
「おぅ、アイツんトコか。トッドに伝えとけ。もっと街に降りて来いってな。これサービスしとっから」
そう言うと店主は値段よりg数を多く売ってくれた。
「は・・はい！ありがとうございます」
なんとか食材を購入し、丘を登りトッドの家まで辿り着いた。
ダイニングに食材を広げて腕まくりをする。
「大丈夫、マカが料理するところ、ちゃんと見てたもん！
それにスープの味なら覚えてる！あとは、お肉のソテーって・・のは焼くだけだっけ？」
献立は野菜スープとソテーにに決定されたらしい。
「よーっし！美味しいの作るぞー」
シーナが料理を始めて2時間ほど経った頃。
日も暮れて、トッドが作業する手をとめた。

「大丈夫かな・・」

その時、工房の扉の開く音がした。

ゆっくり振り返ると、トッドは慌てて席を立った。

指から血が出ているシーナが涙をポロポロと流しているのだから。

「どうしたんですか！指から血が出てる、それにそんなに泣いて」

「ごめんなさい、ごめんなさい…」

「待ってください、いま救急箱持ってきますから！」

トッドはデスクの引き出しから、救急箱を取り出し、椅子を出してシーナに座るよう促す。

「よかった、傷は深くないみたいですね。少ししみるけど…我慢して」

トッドは指先に消毒液を吹き掛ける。

シーナは痛みをこらえキュッと目を瞑る。

「はい、絆創膏。これで大丈夫」

「ごめんなさい…」

トッドは指先に素早く絆創膏を巻く。

「料理で、手を切ってしまったんですか？」
シーナは黙って頷く。
「そうですか。可哀相に、痛かったでしょう？」
今度は首を横に振る。
「何を作ろうとしてくれたんですか？」
「野菜スープと…お肉のソテー」
「野菜スープですか、最近寒くなってきたから美味しいでしょうね」
「でも、上手く野菜が切れなくて…とっても見栄えも悪くて…」
シーナは震える声で必死に話す。
「一生懸命作ってくれただけで十分ですよ。何をそんなに落ち込んでるんですか？」
トッドはシーナを慰めるように、微笑みかける。
「料理ひとつまともに出来ない私はやっぱり落ちこぼれなんです。料理だっていつもルームメートのマカに任せきりだったから。魔法も上手で。マカはとても料理が上手だった。だから有名な菓子職人の片腕になったんです。」

「もしかして、ルームメートのマカさんが料理に魔法を使ってるのを見てたから
さっき魔法で料理をしてみようと思っていたんでしょう」

「…」

シーナは気まずい表情をしながらも頷いた。

トッドはクスクスと笑いだすと、長机から椅子を引き出してトッドが腰掛ける。

「マカさんはきっと、魔法を使わずに料理する方が、本当は得意で、楽に出来ると思いますよ？」

「え？」

シーナは首をかしげる。

「魔法で料理を行うのは、シーナが思ってるより楽じゃない。
たくさんの応用魔法を立て続けに手際よく行うのはとても体力を使うし。
何も魔法を使わずに料理するほうが楽に決まってる。だからきっと…」

「きっと？」

シーナは椅子から身を乗り出す。

「きっと、その菓子職人の片腕になる為に日頃から魔法の練習を積

んでいたのでしょう。
菓子職人は魔法で微妙な味の変化や焼き加減を調節しているらしいですし、
その繊細な魔力のコントロールを得るために、あえて、いつも魔法で料理をしていたんだと思いますよ？」

「そうだったのかな…」

「僕も間違いないとは言いきれません。でもきっと…
とても美味しいでしょうね。マカさんが一生懸命練習して作った料理。」

「うん。とっても美味しいんだぁ、マカの料理」

「きっとシーナの料理だって美味しいですよ。魔法を使わなくたって、一生懸命作ってくれたんですから。」

ふとトッドの顔に陰りが見えた。
どこか寂しげな表情にシーナは気付いた。

「トッド？」

「…いや、職人も、その片腕も…みんなそうした純粋な思いで何かを生み出してるんです。
でも…なかなか純粋な思いのまま生み出し続けるには、今はあまりにも苦しくなったんだなぁって。」

「…何の話ですか？」

「ん？あぁ、今のは独り言です。大したことじゃありませんから。それより、僕お腹空いてしまいました！料理、まだ途中ですか？」

トッドはおどけながら、自分のお腹をさすってみせた。

「まだ…なんです」

「じゃあ、僕も手伝います。ちょうど区切りもつきましたし。」

シーナはデスクを覗き込んだ。

「わぁ、歯車がいっぱい」

トッドのデスクには、様々な大きさの木の歯車が置かれていた。

「うん、農家の耕具の部品なんだ。随分老朽化してたから。とりあえず応急措置」

「歯車の色がちぐはぐ…あ、新しい木片をくっ付けたんですね！」

「正解、老朽化のひどい部分を削って新しい木をくっ付けて元に戻してたんです。ちょっとパズルみたいで楽しくて」

トッドは幼い子どものように笑った。

「ほんと、すごく楽しそう」

「ほら、早く家に戻りましょう。」

トッドがシーナを横切ろうとしたその時だった。

「あの！」

シーナがトッドの服の裾を引っ張った。

「まさか…その格好のままお手伝いしてくれるわけじゃ…ないですよね？」

「？」

トッドは不思議そうに首を傾けた。

「そんな土埃のたくさん付いた服や手でお料理したら具合悪くなっちゃいますよ！
手を洗って……いや、もうお風呂入って着替えてください！」

「あ…」

「井戸は！？」

「いっ…井戸は家の裏…」

「釜戸は！？」

「それも、裏のすぐ、井戸の前…です」

すごい剣幕でたたみかけるように問うシーナに身じろぎながらも、
反射的にトッドは返事をしていた。

「今すぐにお風呂用意しますから！料理はシーナが頑張ります！ほら早く」

「ちょっ…ちょっと」

シーナはトッドの背中を強引に押しながら工房を後にした。

大急ぎで風呂の準備を終え、トッドに入浴を促し。

2人が食卓についた時には、すっかり日が落ちてからだった。

「いやぁ、お風呂の準備してもらえるのなんて子どもの頃以来でした。気持ち良かった」

「あんなに汚れたままでご飯食べてちゃ病気になっちゃいますよ！」

「一応手は…洗ってるんですよ？」

「当たり前です！」

トッドは肩をすくめる。

「それより…味、どうですか？」

「すっごく美味しいです。」

「見た目は……」

「えぇ、なかなか斬新で。」

「それ逆に傷つきます！」

「はは、初めてなら誰だって上手く出来ませんよ。十分です」

「そうですか？」

「はい。僕、誰かに指を怪我してまで料理を作ってもらうなんて初めてで。だから嬉しいです。」

他愛のない会話を交わしながら、2人は食事を終えた。
そのまま食卓でゆったりと夜を過ごしていた。

「ねぇ、トッド？」

「なんですか？」

「トッドは、魔法士職人が嫌い？」

「え、どうして？」

「だって。魔法の話をする時、なんだか悲しそうにするんだもの」

トッドは苦笑した。

「魔法が嫌いなわけじゃありません。ただ、僕は幸せに生きている

職人をあまり知らないんです」

「？」

「僕、小さな頃から大好きな画家がいたんです。その人の描く絵はね、生きているんです」

「へぇ！」

トッドは少し遠くの方を見つめながら話していた。

「初めて見た、僕の大好きな画家の絵は、一本の大木が描かれただけのシンプルなものでした。」

「大木、ですか」

「その絵は、僕の故郷の公園に飾ってある絵で、季節や天気に合われて大木が変化する、とても素敵な絵でした。」

「わぁ、絵の中で木が生きてるんですね」

「そう、幼い私は毎日その絵を見るのが大好きだったんです、でも・・・」

「でも？」

「その時、その画家の住んでいる国じゃ・・魔法はもう、国家に規制されていました。

絵画や彫刻は職人の自己満足と罵り、価値が出なくなっていたん

です。」

「・・・」

トッドは酷く悲しそうだった。

「魔法士職人は、人の倍の寿命が与えられて、魔法を使えばそれが削られるというのは
学園で習いましたよね？」

「はい。」

「それで人間と同様の寿命に合うように均整がとられているんです。
ですが、魔法を異常な早さで膨大な量を使えばそれだけ大量に寿命は削り取られてしまう。
僕の好きな画家の作品は日に日に激しく、焦りや怒りに満ちた作風になっていきました。
かつてはあんな穏やかな絵ばかり描いていたのに。
周りに認められない焦りから、もう心は壊れてしまっていて。
狂気に満ちたまま魔法で絵を描き、３０という若さで壮絶な死を遂げました。」

「悲しい・・話ですね」

「職人は時代に翻弄されるものです。時には命を奪われるほどに追い詰められる。
でも、その才能を持って生まれた職人は、その道を完全に外れることが出来ない。
手足が無くても、何も生み出せなくなっても・・何か別の形でもその道にいないと生きられないんです。

まるで灼熱の炎のようなランプに近づく夜光虫のように。
僕はそんな運命に自分がさらされていることが時々恐くてたまらない。」

「トッド・・・？あなたもしかして」

「・・僕は、シーナ。僕は」

その時、ドアから大きなノックの音が響いた。

「トッド、頼む。助けてくれ」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

第三話　【初仕事！】

ドアの向こうから助けを求める声が聞こえた。

「…クラウさん？」

「シーナが出ます！」

シーナは家の扉を開けると、息を切らせて男性が飛び込んできた。

「お…お肉屋さん！？」

それはシーナが買い出しに出た時に出会った肉屋の店主だった。

「クラウさん、どうしたんですかこんな時間に」

「トッド、お前に一生の頼みがあってきたんだ。」

クラウという名の男はがっしりとした体とこんがり焼けた肌。シーナの倍はあるであろう巨漢だった。

その体でドシンとテーブルに手を置き頭を下げた。

「僕に、一生の頼み…？」

シーナは扉を閉め、トッドの隣に座った。

「娘が、病気なんだ。」

「…アンナちゃん、でしたっけ」

「おぅ、名前覚えてくれてるんだな。ありがとよ。」

「それで…どんな病気なんですか？」

「子どもがよくかかる病気なんだってよ。
でもアンナは少し体が弱ぇんだ。
周りの子より重症になっちまって。珍しい病気と併発しちまったんだよ…」

「お医者さんは？ここにはいないんですか？」

シーナは問い掛けた。
するとクラウの表情が暗くなる。

「いるには…いるんだけどな。もうかなりの歳なんだ。
頼みにいったらよ…
この歳で行う手術にはリスクが高いんだって。新しい医者は雇ってる途中らしくて」

「じゃあ、他の街へ。電車に乗ってどこか」

「外の街に知ってる病院もねぇし…遠くに連れ回すと、
ますます悪化してしまうらしくて連れてってやれねぇんだ…
なぁトッド！治してやってくれねぇか」

トッドは重い口を開く。
「クラウさん…申し訳ないんですが僕は、
医療の知識がまったくありません…。僕にアンナちゃんを治してあ
げる事は…」
「……」
「…だよな、悪かった。俺も無理なこと頼んじまって悪かったな…
じゃあ」
「待ってください」
立ち去ろうとするクラウをトッドは大きな声で呼び止めた。
「なんだ…？お前には治せないんだろう？」
「はい…僕には治せません。
でも…医者の腕を、アンナちゃんの病気を治せる技術を持っていた
頃に
戻すことなら…出来るかも知れません。」
「医者の腕を…？」
クラウはトッドの方へ向き直る。
「僕は修理屋です。医者の腕をもう一度、難しい手術が

出来る頃にまで、一時的になら修理出来るかもしれません。」

「本当か？やってくれるんだな」

トッドは黙って頷いた。

「一時間後に、アンナちゃんと、医者のラステルさんを連れてきてください。あとカルテを忘れずに」

「分かった！一時間後だな」

クラウは走って丘を降りていった。

トッドはふわりと席をたつと。

パンと手をたたいた。

「さて…と。シーナ。遅い時間で疲れてるかもしれませんが・・・お待ちかねの初仕事ですよ？」

「えっ！？」

トッドはニコニコしながら部屋の隅の暖炉に向かう。

そして暖炉に両手をかざし、目を閉じると。

暖炉から蒼白い炎が上がり、さっきまでキッチンや本棚のあったごく普通の部屋は…

真っ黒の煉瓦の壁で出来た、蝋燭に囲まれた部屋へと姿を変えた。

「ん～…ほんといつみても。趣味悪い部屋でしょ？
でもここ、衣装とかチョークとか蝋燭とか。魔力に関係あるものしか置いちゃいけないんですよ。」

まるで何てことないようにトッドはシーナに話し掛けた。

「く…空間魔法。初めてみた。」

「はい、驚いてる暇はありませんよ。この紙を口にくわえて」

「えっ！？」

トッドは一枚の紙をシーナの口へ運び加えさせる。

「むぐっ・・」

「どうですか？床に魔法陣が見えるでしょう」

シーナは口に紙をくわえているため話せないので、首を縦に振る。
シーナの目には薄く光る魔法陣が床に見えていた。

「その紙を加えている間は、床に魔法陣が写ります。
このチョークでその魔法陣を一字一句、間違えることなく写してください。」

トッドが白いチョークを手渡すとシーナは頷き、床に写る魔法陣をチョークでなぞり始めた。

「さてと、急がないと」

トッドは壁にかけられたフード付きのマントを身体にかぶせ、大きなフードを被る。

そのままトッドが壁を叩くと、分厚い本が壁から飛び出した。

「！！」

シーナは飛び出す本に驚き魔法陣を書く手を止める。

「シーナ、集中」

「・・・・」

シーナは再び魔法陣を書きはじめた。

トッドは本を開き、紙に文字を写し取っていた。

そして1時間が経過した。

「うわ、なんだここ」

娘のアンナを抱きかかえ、クラウが医者のラステルと共に部屋へやってきた。

「不気味ですいません。魔法陣が光ればもう少し明るくなりますから。」

トッドが3人を出迎える。

「トッド！魔法陣写し終わりました」

「お疲れ様。さぁ、3人はこちらへ」

3人はトッドに導かれるまま魔法陣へ近づいた。

「クラウさん。アンナちゃんを魔法陣の中央に寝かせてください。」

クラウはぐったりとしたアンナを魔法陣の中央へ寝かせた。

「クラウさんは魔法陣から出て、ラステルさん。アンナちゃんのカルテを持って魔法陣の中へ。寝ているアンナちゃんの隣に円があるの分かりますか？」

「は・・はい」

小柄で少し白髪の多い、白衣を着た男性が背中を丸め答える。

「その円の中に立ってください。アンナちゃんが見えるように」

ラステルは円の中へ立つ。

「そう、完璧です。それでは今から始めていきます。シーナ、私の隣へ」

「はい！」

トッドはラステルの背後にあたる魔法陣のすぐ外側に立つ。

「ラステルさん、これから僕の言うとおりに行動してください。いいですね」

トッドはラステルの背中に語りかける。

ラステルは頷く。

「ではラステルさん。今からあなたの腕の修理を始めます。
しかしそれは、ラステルさん。貴方の記憶が必要なんです。
ですので、これからラステルさんには、脳内でアンナちゃんの手術を行っていただきます」

「手術を・・？」

「えぇ。目を閉じてみてください。」

ラステルは目を閉じる。
すると、うわっと小さく声をあげた。

「いま貴方には、手術台に寝ているアンナちゃんが見えているはずです。横には手術の道具があるでしょう？」

「はい」

「私が、始めてくださいと言ったら、ラステルさん。貴方はアンナちゃんの手術を行ってください。出来ると信じて」

「・・・分かりました。」

「ラステルさん、いま貴方は心の世界にいるんです。
その世界では、貴方は若くて、思うように手術が出来るはずです。
僕は同時進行で、その頃のラステルさんの技術を今の体にコピーします。
目が覚めたころには、ラステルさんの腕は、若いころのように手術を出来る腕に戻っているでしょう。
二度手間になってしまうのですが、その腕で、今度は本物のアンナちゃんに手術をしてあげてください」

ラステルは頷いた。

「始めてください」

魔法陣が激しく光りだした。
ラステルは目を閉じながら何も持っていない手を動かしだした。

＊＊＊

「・・・・以上です。ラステルさん、目を開けてください」

魔法陣の光が消える。

「・・・・手が、思うように動く」

ラステルは手を握ったり開いたりを繰り返す。

「成功のヴィジョンを描けた結果です。成功しました。もう大丈夫です。貴方の手は昔の様に動くはずです」

ラステルはトッドの方へ向き直る。

「ラステル・・さん？」

シーナが目を丸くする。

「お嬢さん、どうしました？」

「い・・いえ、なんだか背筋がシャキンとしてるっていうか・・なんだかイキイキしてます！」

シーナにはラステルの姿が別人のように感じられた。

背筋はシャンと伸び、ぼうぼうに伸びた白髪は黒くなり消えていた。

「体が軽いんです。さぁ、早く手術を始めましょう」

「・・・、トッド」

魔法陣の外でずっと娘の姿を見守っていたクラウがふらりとトッド

の元へ近づく。

「アンナちゃんは、きっともう大丈夫です。ラステルさんがきっと治して」

クラウはトッドの両手をがっしり掴みブンブン振り回す。

「ありがとな、本当にありがとな！このご恩は一生忘れねぇよ！！」

「お力になれてよかったです、ク・・クラウさん、あの、まだ書類が残ってるんですけど」

「書類？」

クラウの手がトッドから離れる。

トッドはポケットから書類を取り出した。

「えぇ書類。ラステルさんにも。あと、これはアンナちゃんの分。元気になったら書いてもらって僕の元に届けてください」

「わ・・分かった」

「ただの魔法使いましたって意味のものなので、ササッと書いちゃってください。」

トッドは壁に手をかざし、部屋を元に戻す。

「お疲れさまでした。早く元気になるといいですね」

「トッドさん、といいましたかな」
ラステルはゆっくりトッドに近づいた。
「私は、今回のことで自信を取り戻せたような気がします。これからもがんばっていこうと思えるようになれた気がするんです。
本当に・・・ありがとうございました」
「頑張ってください」
「じゃあな、トッド。たまには街に降りてこいよ」
「はい。」
3人は静かに丘を降りていった。
「お疲れさまでした、シーナ」
シーナは俯いたまま黙っている。
「シーナ？」
「魔法士・・なんですね」
シーナはぽつりと呟いた。
「トッド、魔法士なんですね」

「・・・・・」

「それに・・あんな高度な魔法、見た事ありませんでした。」

「黙っててごめん・・」

「・・・正直ものすーっごく驚いてます。でも・・」

シーナはトッドの手をとった。

「シーナは、トッドの片腕として、これから精一杯頑張っていきます、だから・・・」

「・・・？」

「絶対、無理しないで下さいね。命をたくさん削る様な事、しないでくださいね」

「・・・・頑張ります」

トッドは優しく微笑んだ。

2人の初めての夜が、終わった。

第三話　【初仕事！】（後書き）

この３話目で１つめの区切りとなります。
なにか感じていただけた事をお聞き出来たら嬉しいです。
これからもよろしくお願いいたします。

第四話　【焼け焦げた懐中時計】（前書き）

第４話です。
今回はある女性が依頼主となります。

第四話　【焼け焦げた懐中時計】

「それにしても、やっぱり・・」

「シーナ・・しつこいです」

工房では、トッドはデスクで工具の修理を行い
その後ろではシーナが本の整理を行っていた。
あの初仕事から3日が経っていたが
シーナはいまだ興奮冷めやらぬ状態であった。

「や、だって私本物の魔法士初めてみて、その、もうとにかく感動的で！
体内の衰えを修理していくなんて高度な魔法、
学園でも見たことありません！」

「もー何度も何度も言わないで下さい恥ずかしいですからっ！」

トッドは耳を赤くしながら叫ぶ。

「恥ずかしがることないじゃないですか！素敵です」

「大したことはしてません！
それにあれは・・・ラステルさんの頭に描いた自己の身体を写し取ってラステルさん本人に同化させた魔法で

つまり重ねただけなんです。目的が果たされたら・・まるで夢だったように剥がれおちてしまうんです。
僕は医者じゃありません、だから老化をとめることは出来ません。
でもあの事をきっかけに自信を付けてくれたことは、喜ばしいことですけどね」

トッドの言うように、ラステルの若返った身体はアンナの治療を終えた後、元に戻ってしまった。
しかしラステルはかつての自信を取り戻し、自分の後を継ぐ医者の後輩とともに積極的に腕を新たに磨きなおすことを決意した。
そのことを先日ラステルは報告に訪れていた。

「よかったですね。ラステルさんも、アンナちゃんも！
でも、この街に住んでいる人は・・みんなトッドが魔法士であることを知ってるんですか？」

「うん、僕がこの町に来た時からね。みんな知ってるよ」

「そうだったんですか、でも凄いなぁ・・あれ？」

シーナはふと考え込んだ。

「どうしました？」

トッドは作業する手をとめ振り返る。

「あの・・学園に通っておきながらこんな事聞くのもなんなんですけど」

「なんです？」

シーナはもじもじしながら呟いた。

「あのぉ・・魔法とレプリカ魔法の違いって・・なんでしたっけ？」

トッドは目を丸くする。

「学園で習いませんでしたか？」

「習ったと・・思うんですけど・・」

トッドは苦笑する。

「ざっくりでいいのなら、お教えしましょうか？」

「本当ですか！？」

シーナは目をキラキラと輝かせ喜んだ。

「あまり詳しくは僕も教えられないかもしれませんけどね。
夕刻まで待ってください。お互いの今日の仕事を終えてから、ゆっくりお教えいたします。」

「よーし、シーナ今日は掃除洗濯料理、ものすごく頑張っちゃいます」

「その意気です」

子どものようにはしゃぐシーナを見て、くすくす笑いながらトッドはデスクに向き直り作業を再開した。

そして日が落ちかけ、お互い作業も落ち着いた頃。

「さて、じゃあお話しましょうか」

トッドとシーナは向かい合いようにテーブルを挟み席についた。

「出来るだけ・・分かりやすくお願いします」

トッドはまたクスリと笑い、ゆっくりと話しだした。

「まず…ざっくりとレプリカとの違いから説明しますと
シンプルに…魔法陣が必要か、そうでないかです」

「魔法陣、ですか」

「そう。魔法士は、簡単な魔法なら魔法陣を書かなくても使えます。
魔法陣の構造を頭にイメージすれば使うことが出来るんです。
複雑な魔法陣だと頭ではイメージしきれないので描かないと出来ない時があります。
その魔法陣を安易に残しておくと盗まれたりしたら大変なんで
すぐに消せるチョークで描くのはそのためです」

「ちょっと待って。頭に思い描いて使えるのならレプリカ魔法はどうして生まれたの？」

「遠い昔に話が遡るのですが…ある魔法士が、人間に魔法陣を売ったんです。」

「売った！？」

シーナは身を乗り出して詰め寄った。

「魔法陣には、その完成形が描かれた瞬間に魔力が宿ります。
でもこの状態ではまだ人間には発動させることが出来ません。
でも、遠い昔…1人の魔法士が魔法陣を人間にも使えるものに改造して作り上げてしまった。
これがレプリカ魔法の誕生のきっかけです。」

「……」

ほぉーと息をはきシーナは頷きながらトッドの話に耳を傾ける。

「次にレプリカ魔法陣と魔法士の魔法陣の違いについて。
魔法士の描く魔法陣とレプリカの魔法陣にはある特有の違いがあります。それは…」

「それは？」

「生命の証です」

「生命…」

シーナは胸をおさえる。

「魔法士の使う魔法陣には、目に見えないその魔法士の命の欠片が含まれているんです。
しかしレプリカ魔法にはそれがない。だから完全に魔法陣を真似ることは出来ません。」

「知らなかった」

「人工知能と本物の生命と言えば分かりやすくなるでしょうか。
真似るにも限界があるという事です。
じゃないと職人魔法士が存在出来なくなってしまいます。
魔法で作られた物はその職人にしか作れないという事です。
魔法の使えない職人だって、自分にしかない才能や業を持っているでしょう？
魔法も真似されないように工夫がされてるんです。」

「へぇ～」

「あと、魔法にはもちろん禁忌が存在します。死者の蘇生や傷や病の完治術など。神の領域に触れる魔法は使えません。
それともう1つ。誰かへの憎しみや殺意のこもった魔法です」

「戦争に魔法士が出られないっていう」

「そう、僅かでも誰かを傷つけようという思いのこもった魔法は魔法士を時には死まで追い込む罰が下ります。
だから職人魔法士も、兵器など作れないようになっているんです。
」

「でも、それならどうして？魔法士の作ったモノが戦争に利用されるの！？」

「簡単な話です。」

トッドの表情が険しくなった。

「例えば職人に…子どもに与える人形を作ってほしいと頼むとき…核だけが欲しいと言います。つまり人形の心臓部分のみ。職人は、子どものおもちゃと信じ込み、核部分を大量に生産し売り渡した。

この時魔法士の思いには憎しみの感情はないでしょう？」

「まさか・・・騙したの！？」

「それが殺意を持たせずに職人魔法士の人形を軍事に利用する作戦だったんです。魔法士をかつて壊滅にまで追い込んだ戦争のきっかけです。」

「……」

「生き残った魔法士は秘策を考えて…そのおかげで今は職人魔法士の作ったモノが利用されることも本当に少なくなりました。」

「秘策って？」

トッドの表情が緩む。シーナに優しく微笑みかけた。

「まだシーナには教えられません。魔法士職人生命のかかった重要機密です。」

「…まだ未熟っていうこと…ですよね」

「そうですね、精進してください。」

トッドはクスクス笑いながら席を立った。

「以上、僕の講義は終了。さて、休憩もしたことだし夕飯までにもう一仕事しますか」

「あ、私も夕飯の仕上げしちゃいますね」

シーナが席を立とうとしたその時

「すみません、すみませーん」

玄関から女性の声がする。

「お客かな、シーナ。出迎えてあげてください」

「はい！」

扉をあけると、髪の短い女性が純白のワンピースに身を包み立っていた。

「こちらに、修理屋さんのトッドはいるかしら」

大人の色気ある風貌にシーナは息をのむ。

「どちらさまでしょうか」

トッドが玄関にやってくると女性は照れるように笑う。

「お久しぶりです。リリィの友人のアメリアです。髪をバッサリ切ったから分からないかしら。」

「あ・・・あぁ！アメリアさん」

トッドはしばらく考え思い出したようだった。

「今日はね、ある物を修理してほしくてここまで来たの。聞いてくれる？」

「もちろんです。工房でお話を聞かせていただきたいのですが、よろしいですか？」

「もちろん」

アメリアを含め、シーナ、トッドの3人は工房へと移動した。

「これなんですけど・・」

アメリアは黒く焼け焦げた懐中時計を差し出した。

「うわ、真っ黒でボロボロ・・」

シーナはポロリと言葉が漏れた。

「アメリアさん・・この時計」

トッドは神妙な顔で時計を見つめていた。

「この時計の時間を・・進めてほしいの。」

「焼けた跡から、かなりの年数が感じられますけど・・いつから止まっているんですか？」

トッドは真剣な表情で問う。

「3年前よ。」

「それをどうして今・・直したいと思ったんですか」

アメリアは、ふと寂しそうな表情を見せた。

「私・・近いうちに結婚するの。これは・・昔の恋人の形見なのよ。彼、炭鉱の爆発事故に巻き込まれて死んじゃった。いつもずっと身につけてた懐中時計も、黒こげよ・・・。」

「恋人の形見の時計だったんですか」

シーナもつられて寂しい表情になる。

「前に進むために、髪もバッサリ切ったの。それに・・この止まった時計が、私の時間も止めているんです。

この時計が時を刻まないと・・私も前に進めない」

「・・・・・・・・」

トッドはしばらく黙りこんだ後、重い口を開いた。

「アメリアさん。貴方には2つの選択肢から選んでいただく必要があるんです」

「2つの・・？」

トッドは人差し指を立てる。

「まず1つ。この懐中時計、修理するとしたら、焼け焦げた部品を新しくしなくちゃいけない部分が多すぎて

修理出来た頃にはほとんど別物になってしまう。

僕の魔法を使っても同じことです。

新品同様にすることが出来ますけど・・本当にいいんですか？」

「・・・・綺麗になってしまったら・・きっと、彼の思い出まで失われるように思えてしまうのかもね。

でも、私は前に進みたい。時を進めたいの！」

「あと1つ。アメリアさん、貴方の記憶の中の動いていた頃の懐中時計をこの黒こげの時計に重ねることで
この時計を動かすことが出来ます。
でも、再び黒こげになる時がきたら魔法は解けて元の黒こげの懐中時計に戻ってしまいます。
しかし懐中時計が動いてるその間、時計が動いていたその頃の風景ごと空間魔法で再現することが出来ます。」

「つまり・・それって」

「前に進みたいんでしょう?それなら彼に直接伝えたらどうですか?」

「私が・・彼に?」

「直接彼と決別することが、アメリアさん・・貴方の本当の願いなんでしょう?」

「・・・・時計の時を戻して、生きていた頃の彼に会えるってことなのね?」

「幻・・ですけどね」

アメリアはしばらく俯いていた。

そしてゆっくり顔をあげる。

「いいわ、この時計に魔法をかけて。

直接彼に、私が結婚して前に進むことを伝える。それが幻でも構わない。
　前に進むためだもの」
トッドは黙って頷いた。
「分かりました。では今から1時間後、もう一度ここへ来てください。
　もちろん懐中時計も忘れずに」
外はすっかり日が暮れて、三日月がぼんやりと工房を照らしていた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

第四話　【焼け焦げた懐中時計】（後書き）

ここまでお付き合い頂いている方へ。
とても大きな力になっています。
よろしければ今後ともお付き合いお願いいたします。

第五話　【記憶の世界】（前書き）

第５話です。
４話からの続きものになっています。
懐中時計編は、今回で完結いたします。

第五話　【記憶の世界】

「はいシーナ、今回はものすごく大変です。」

ところ変わって、黒い煉瓦に囲まれた部屋にいた。

「どう、大変なんですか？」

「大きな空間魔法です。今回は僕も手伝います。この壁中に魔法陣を書きますよ。しかも前回よりかなり複雑な」

「は・・はい！」

「床、天井、四方の壁に魔法陣を張り巡らせます。シーナはこの紙をこの前のように口にくわえて魔法陣をなぞってください」

トッドはシーナに紙を渡し、シーナはそれをくわえる。

「シーナは床と天井をお願いします。私は四方の壁を・・。」

2人は一心不乱に魔法陣をチョークで描きだし、なんとか1時間以内に済ませた。

シーナはすでにクタクタであった。

「こんばんは・・」

ゆっくり扉を開きアメリアが工房へ到着した。

「お待ちしてました。早速始めましょう」
玄関で出迎えたトッドがアメリアを工房の中へと導く。
「懐中時計は持ってきてくれましたか？」
「はい！ここに・・」
アメリアは服のポケットから焼け焦げた懐中時計を出して見せた。
「それじゃあ、その懐中時計を握りしめて。魔法陣の中心の円に立ってください」
「はい。」
アメリアは懐中時計を握りしめ魔法陣の中心の円の上に立つ。
「シーナ、こちらへ」
「はっ・・はい！」
クタクタになって座り込んでいたシーナは慌てて立ち上がりトッドの元へ駆け寄る。
「アメリアさんの隣にある円に、この水晶をアメリアさんに差し出すように突き出して持っててください」
「分かりました！」

トッドから水晶を受け取り円に入ると、アメリアに差し出すように水晶を突き出した。

「シーナ、そのままの状態を保ち続けていてください」

「はい！」

「いい返事ですよ、その調子です」

トッドはマントを羽織りフードを深く被る。

「さぁ、今から今回の魔法について説明していきます。
今回は、この空間にアメリアさんの記憶の中の風景を重ねる魔法を行います。
アメリアさんは、タイムスリップの様に、亡くなった恋人の・・・生きていた時代を体感していただきます。
アメリアさんの記憶を、シーナのいる円に送りこみシーナの持つ水晶に映し出します。
つまりシーナの持つ水晶はフィルムの様なものです。それを・・」

トッドは掌から青白い炎を出す。

「この炎で照らして映し出します。この炎は映写機の役割みたいなものです。水晶に炎をあて
部屋全体に反射させることで部屋全体に魔法をかけることが出来ます。
その間は僕たちの姿も見えませんし、貴方にはその空間は本物同然に体感できることが出来ます。
心おきなく、彼に想いを伝えてきてください。」

アメリアは黙って頷いた。

「目を閉じて。」

アメリアは、言われるがままゆっくりと目を閉じる。

「始めます・・！」

その時、トッドの放つ炎が小さな爆発を起こした。

「どうしたんですか！？」

アメリアは驚きトッドの方を振り返る。

「あ・・、あの、久しぶりだったんで、加減を間違えてしまいました。今度こそ・・すいません」

「分かりました」

アメリアは再び目を閉じる。

「・・始めます」

トッドは小さく揺らめく青白い炎を手のひらから出し、水晶を照らす。

すると照らされた水晶は眩い光を放ち部屋全体を照らしだした。

「・・アメリア、アメリア！」

アメリアの耳に懐かしい声が響く。
ゆっくりと目を開くと、懐かしい姿が目の前に立っていた。
「アメリア、どうかしたのか？」

「レイ・・？」
アメリアが、目を開くと、そこはアメリアの部屋だった。
目の前には、亡くなった恋人、レイが立っていた。
「なにボケッとしてんだよ、しっかりしろよ」
「ご・・ごめんレイ。最近なんか寝不足で」
アメリアは必死に動揺をごまかす。
「大丈夫かよ。あのさ、この誕生日プレゼント、開けてもいいか？」
「誕生日プレ・・あぁ、いいよ！開けて開けて」
レイは喜びながら白い袋に付いている赤いリボンをほどき、中身を取り出す。
「うわ、懐中時計だ！」

中から出てきたのは先ほどの黒こげていたはずの懐中時計が、新品同様にピカピカになっていたものだった。

アメリアは、レイの誕生日に懐中時計を送ったことを思い出し過去に本当に戻ってきたのだと実感した。

「時計、欲しかったっていってたでしょう？」

「うん！ありがと、大事にするよ。うわ、すげー嬉しい」

はしゃぐレイをアメリアは懐かしむように見つめていた。

「・・アメリア、なんかやっぱり元気ないよ。どうかしたのか？」

「えっ！？・・ううん、そんなことないったら」

レイははぁ、と大きくため息をつくと、アメリアの手をとる。

手を握られた感触があることにアメリアは驚きレイの顔を見つめる。

「手握ったくらいで驚くなよ、ほら。行くぞ」

「あっ、ちょっと！」

レイはアメリアを外へ連れ出した。

外は広く大きな並木道で、散歩には絶好の一本道が続いていた。
紅葉で色づいた葉の並ぶトンネルの様な並木道をゆっくりと2人で歩く。

「アメリアは、いっつも何か落ち込んだりしてる時に、この道歩いて、他愛もない話して帰る頃には
すっかり悩んでた内容なんて忘れてるんだよ」

「うん・・」

「この道好きだったもんな」

「・・うん」

レイはふと立ち止まる。

「ちゃんと俺に話してみ？何があったんだよ」

「・・・・」

アメリアはぐっと唇を噛みしめる。

今にも泣き出しそうなアメリアをレイは心配そうに見つめて、アメリアの頭にポンと手を置いた。

「・・意地悪しちゃったな、ごめん」

「え・・？」

アメリアは戸惑いながらトッドの顔を見上げる。

「お別れ、言いに来てくれたんだろ？」

「え・・？」

アメリアがますます戸惑う。

「実は・・シーナって女の子の身体借りてこの空間に入り込んだんだ。」

「じゃあ・・」

「久しぶり、3年ぶりだよな」

レイは苦笑しながら笑いかけた。

「レイ・・、レイっ！」

アメリアは涙をぽろぽろ流しレイに抱きつく。

「おいおい、もうすぐお嫁さんになる子がメソメソしてちゃダメだろ」

レイはアメリアの頭を優しく撫でながらささやく。

「・・・レイ、私・・やっぱりレイ以外考えられないよ。レイとず

っと一緒にいたい」

「それは無理だよ。それにアメリアは俺にお別れ言いに来てくれたんだろ？最初の目的忘れんなって」

「・・・」

アメリアは再び口をつぐむ。

「いっつも、何をするにも俺の顔色うかがって、気遣う子だったから心配で、空にもあがれなかったんだぞ？そろそろ楽にしてくれよ」

「・・・・だって」

「本当はすっげえ寂しいし、ずっとそばにいてあげたかったけど。その懐中時計、大事に持っててくれるだけで俺は十分だから。」

「レイ・・」

「もう俺の顔色うかがう事なんてしなくていいから。覚えていてくれるだけでいい」

「忘れるなんて絶対にしない！」

「はは、ありがと。たいせつにしてもらうんだぞ」

「うん・・・」

「じゃあな・・、さよなら」

頭をなでてくれた手が離れたのが分かった。
はっとして顔をあげるとそこはもう、黒い煉瓦の部屋だった。

「アメリアさん。魔法が解けました」

目の前にはシーナが眠っていた。

「・・レイが、会いに来てくれたんです。」

アメリアが黒こげの懐中時計を見つめて呟く。

「そのようですね。炎が爆発した理由が分かりました。」

「シーナちゃんの身体、勝手に借りてたみたいですね」

「役に立てて嬉しいと喜ぶはずです」

アメリアは立ち上がった。

「ありがと、トッド。ちゃんとお別れが言えたわ。時計は、元に戻っちゃったけど、確かに動いてたから。もういい」

「お役に立てて光栄です。」

数日後、アメリアと街の男性との結婚式が行われた。

純白のウェディングドレスに身を包んだアメリアの首には
懐中時計がかけられていたという。
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

第五話　【記憶の世界】（後書き）

懐中時計編は、今回で完結いたします。

少し切ない終わり方ですが、どう感じていただけましたでしょうか。

第六話　【客の来ない日】（前書き）

今回は依頼人が来ないある日のお話です。
いつもと違う雰囲気を楽しんでいただけたらと思います。

第六話　【客の来ない日】

いつものように修理を行っていた。

街の子どもの壊れた船のおもちゃ。

部品をくっつけ、研き再び動きだすように命を吹き込む。

「…あれ」

ネジを持つ手が震えていた。

片手で震える手を握っても震える手が止まらない。

「まずいな…あれっ、くそ……」

震えを止めようとする手に力が入る。

その時、洗濯物を干し終えたシーナが工房に戻る。

「トッド！？」

何事かとシーナがトッドの手に触れた途端に

不思議と手の震えが、ピタリと治まった。

「……」

「大丈夫ですか…？」

トッドは神妙な顔つきで、じっと手を見つめていた。

しばらくして、トッドは無言で立ち上がると、工房のドアにかけてある、朱色の帽子を深く被った。

そしてジャケットを着ると、ようやくシーナに向き直る。

「シーナ急で申し訳ないのですが、僕これから隣街に行ってきます。」

「えぇ！？」

「…いや、ちょっと体調悪いみたいで。隣街にかかりつけの病院があるので・・・診察してもらってきます。すぐに戻りますから、留守番お願いします。では…」

「ちょっと…」

「あ！そういえば」

トッドは笑顔で振り返った。

「シーナ、今日午後から街でお祭りが開かれるんです」

「お祭り？」

「えぇ、収穫祭です。忘れるところでした。丁度よかった」

「待ってください！シーナに1人で行けっていうんですか！？」

「あ・・あぁ～リリィさんに連絡してみます。ちょっと待っててください」

トッドはリリィに連絡をとり、午後にシーナを迎えに来てほしいと頼んだ。

「快くOKしてくれました。家の戸締りを忘れずに、これは鍵。工房は僕が閉めていきますから。」

「・・・・・・」

シーナはトッドから家の鍵を手渡されたが、しょんぼりしていた。

「収穫祭！きっと楽しいですよ、シーナが思うよりこの街は広いですし、大きな祭りです・・し・・・。」

「行ってきます・・」

シーナはふらりと工房を出てしまった。

「・・・今は、仕方ないんです」

そうポツリと呟くと、トッドは早々と工房を後にする。

丘を下ったトッドは帽子を限界まで深く被り早足で商業区、住宅区を抜けていく。

祭りの準備で賑わう町民の誰とも目を合わすことなく、下を向きながら列車に飛び乗った。

「……行きたくないなぁ」

独り言をポツリとつぶやき、空席に腰を下ろす。

隣街には３０分ほどで到着した。

駅のすぐ裏に、古びた病院が建っていた。

「大丈夫・・大丈夫・・、大丈夫・・」

トッドは苦虫を噛むような表情で、ゆっくり病院の中へと入っていった。

その頃シーナは、トッドの家で紅茶をすすっていた。

「トッド…大丈夫かな」

しばらくぼんやりしていると、外から聞き覚えのある声がした。

部屋にノックの音が響く。

「シーナちゃん！迎えに来たよ」

「リリィさん！」

リリィの迎えで2人は丘を下り、街の広場へ着いた。

「うっわぁー！凄い」

トッドが言ったように、広場に集まる人の数は

初めてシーナが街に訪れた時に見た人の数の数倍はあった。

それぞれが露店を開いたり収穫された野菜で作られた料理が配られたりと

広場はとても賑わっていた。

「あとで畑の野菜自慢とか、ミスコンとかイベントがたくさんあるから。

まずは私達もお昼にしましょう」

「はい！」

シーナとリリィは、町民から野菜料理をいただき、広場のベンチに腰掛けた。

「美味しい！」

「街の自慢のレストランのシェフが集結して作ってるからね。

もちろん、野菜本来の旨味も格別なのよ？しっかり食べときなさい」

「はい！」

シーナは幸せそうに料理を頬張る。
そして上品に料理をいただくリリィの姿が目に入ると
肩をすくめ、シーナは小口でちょっとずつ料理を食べ始めた。

昼食を終えた頃、ステージでは街の楽団の演奏が行われ
2人はしばらくベンチに座ったまま音楽鑑賞をしていた。

「あの…リリィさん」

「ん～？」

「トッド……病気なんですか？」

シーナは思い切って切り出した。

リリィの視線は真っ直ぐ、楽団の立つステージに向けられたまま返事をする。

「私の口からは…何も言えないわ」

「……」

シーナはしょんぼりと俯く。

「彼は、この街に来た時にはもう…ボロボロだった。」

「どういう…意味ですか？」

「初めてトッドに会った時…、まるでこの子、恐怖とか…絶望とか苦悩とか悲しみとか…一生に味わうツラい事…あんな若くて、か細い体をボロボロにして、全部抱え込んでるように見えた。きっと今もそう…」

「……」

シーナはポカンとしていた。

それを見たリリィは優しく、少し淋しそうに微笑むとシーナの頭をくしゃりと撫でた。

「だから、あんまりあの子が無理しないように、しっかり支えてあげてね。シーナちゃん」

「……」

シーナは複雑そうな顔をして黙って頷いた。

「あと、トッドがもし…自分にたくさん隠し事してるんじゃないかって思うことがあったりしたら…」

シーナはドキリとする。

今日、半ば強引にトッドが1人で隣街に行ってしまった事腕の震えのわけを誤魔化されたことも気になっていた。

「シーナちゃんを信頼できないから、秘密にしてるんじゃないよ」
シーナにとっては意外な発言だった。
「すぐに分かると思うから。」
それからは、２人からトッドに関する話題は出なくなった。

一方その頃隣街の病院では、トッドの診察が行われていた。
「うん、脈拍…体温、肺や胸の音にも異常はなさそうだね。」
白衣を身にまとう中年のドクターがトッドに診察結果を伝える。
「…あの、僕の症状の現れる周期は…」
おそるおそるドクターに問うトッド。
するとドクターは首をゆっくり横に振り、ため息混じりに呟く。
「僅かだけど…また短くなってるね。」
「……」
「トッド、魔方士専門の医学は今も確実に進歩してる。それにこれは薬さえあれば問題ない、少し頻度が増えるだけだ」

「僕もいつか…父さんみたいになるんでしょうか」

ドクターは、くい気味に答える。

「君とお父さんは違う、それにあれは、君の作品を守るための勇気ある行為だ。
本来苦しむのが…君も含めて魔法士なことが私には、ずっと疑問なのさ。
だからこそ、君の恐れているような事には、私がさせない」

「魔法を使ってる間は…いつも怖いくらい心が落ち着くんです。
魔法士が魔法を使わないのは…魔法を使い寿命を消費することで…
人間と均整を保つ…この世のことわりに背く行為ですから」

「つらい運命だ」

「薬の効果が切れ始めた途端に暴れだすんです。
職人なら…早くモノを生み出せって。職人を捨てた僕への罰のように。」

「…トッド」

「怖いんです！職人の腕を捨てた僕は…いつか自分に流れる職人の本能に呑まれて狂ってしまうんじゃないかって…
段々薬の切れる周期も短くなってきたし。先生…僕の手はこれからも…凶器を生みたいと疼き続けるんですか…？」

「君の作品は凶器なんかじゃなかった、あれは利用されただけだ。」

「それでも僕が作り出したことには変わりないでしょう？僕の手は…、僕の手は汚れてる」

トッドの手は、カタカタと震えていた。

「自分をそんなに蔑んではいけない。自分の作品をそうしたくなかったから君は自らああやって…」

「…とにかく、もっと強い薬をください…、お願いします」

トッドは席を立ち病室をあとにした。

「おかえりなさいトッド！」

帰宅すると、シーナが元気に迎えてくれた。

「ただいま、お祭りどうでした？」

「収穫祭とっても楽しかったですよ、もうお料理も美味しくって美味しくって。
ほら、これ！こんなに野菜もいただいちゃったんですよ？」

机一杯にたくさんの野菜が置かれていた。

「うわ、すごいですね」

「今日はリリィさんに手伝ってもらって、たっくさんお料理も作り

ましたよ！
あ、そうだ牛の面白いコンテスト！クラウさんの牛優勝したんですよ？
もうすごく大きな、こーんな立派な牛が」
「へぇ～」
「あ、あと街一番の美人を決めるコンテスト！
グランプリ、アメリアさんだったんですよ、と～っても綺麗だった」
「素敵ですね」
「あとは～えっと、え～っと・・」
トッドはクスクスと笑いだした。
「本当に、とっても楽しかったみたいでよかった。
シーナ、僕お腹ペコペコなんです。
リリィさんと作ったお料理、早く食べてみたいな」
「あ、はい！すぐに温めなおしますね！座って待っててください」
シーナは台所に駆けていく。
「シーナ」
「はぁい？」

料理を温めなおしながらシーナは鼻歌交じりに返事をする。

「今日のことも含めて・・いろいろ
いつかちゃんと、全部シーナに話しますから。
ただこれだけは言っておきたくて。
何もシーナを信用できないからとか、未熟だからとかそういうわけじゃなくて・・
えっと、うまく言えないんだけどとにかく」

「私、待っていられますよ？」

シーナはテーブルに料理を並べだす。

「ここにいさせてもらえるなら、私、お婆ちゃんになってもずーっと待てます。
今日はしょんぼりしちゃってすいませんでした」

「あ・・いや・・」

「さてと！いただきましょうか！私もお腹ペコペコ！」

「シーナ、あの僕」

「はい手を合わせてっ！」

「っ！」

トッドは反射的にシーナにつられて手を合わす。

「いっただっきま～す」

「い、いただきます！」

慌ただしく2人の夕食は始まった。

「本当に、今日の料理すっごく美味しい」

「そうでしょ？」

「特にこのニンジンのニョッキなんて本当ものすごく」

「あ・・それ全部リリィさんが」

「・・・や・・野菜の！野菜の味がとっても！あーやっぱり旬といいますか」

「下手なフォローしないでくださいよ～・・」

「すみません」

「あはははは、冗談ですよ。ほら、そのパプリカのマリネ、私が作ったんですよ？」

「これですか？」

トッドはマリネを小皿に移し、パクリと一口。

「・・・うん、うん！レモンが利いてて爽やかで、すっごく美味しい」

「やったぁ！」

シーナは幸せそうに微笑み、料理に手を伸ばす。
楽しそうに食事をするシーナを
トッドは手をとめてしばらく眺めていた。

「・・・シーナ」

「はいっ？」

シーナが顔をあげると、頬には白いサワークリームが付いていた。

「・・、うちに来てくれてありがと」

「えっ・・やだそんな改まって、恥ずかしいじゃないですか」

「あれ、恥ずかしい？それはほっぺにクリーム付いてるから？」

「えっ！？あ、うそ恥ずかしい、言ってくださいよ～」

「あはははは」

工房に客の訪れない秋の夜は
2人の笑い声が響き、賑やかに更けていった。

第七話　【過去を知る友人】（前書き）

トッドの過去を知る友人が依頼人です。
ここからトッドの過去に触れていきたいと思っています。
早いですが物語の中盤に突入していきます。

第七話　【過去を知る友人】

秋の風が少し肌寒くなってきた頃のある日。

「トッド、トッド！」

慌ただしくシーナが工房を訪れる。

「どうかしましたか？」

トッドはいたって落ち着いた様子で応対する。

「あの！色々あったんですけど、何から話そう・・えっと。、
買い物帰り、家の前に、１人の女性がいたんです。
お客様ですか？って聞いたら、何も言わずに帰って行っちゃいました。」

「はて、誰だったんでしょうね」

「あと！これが大事な話！トッドの友人とおっしゃられて訪ねてこられた方が・・いるんですけど・・でもぉ～・・・」

「でも？」

トッドは作業の手をとめる。

「なんといいますか、あの・・その人・・髪は真っ青、服はダボダボ、大きなサングラスにピアスなんて両耳合わせて８つも！
ジェットボード、でしたっけ！空飛ぶスケボーみたいな派手な乗

り物でビュンって！
とにかくその・・ど派手で！」
トッドはクスクスと笑いだす。
「あんな派手で怖そうな人と・・お知り合いなんですか・・？」
シーナはもじもじしながら聞く。
「えぇ、たぶん知り合いです。
大丈夫、その派手な風貌には覚えがあります。
僕の友人です。工房まで来てもらってください。」
「えぇ！？……はい」
シーナは戸惑いながらも、派手な青年を工房へ通した。
「よぉートッド久しぶり！元気だったか」
「帰ってきてたんですね、ギルバート」
「あぁ、2日前に。半年ぶりの帰省だ。」
ギルバートと呼ばれる青年はズカズカと工房へ入ると長机から椅子を引っ張りだしドシンと座る。

「あ、なぁトッド。今日はあの綺麗な姉さんいねーの？名前が…エリィ？」

「エリィじゃなくて、リリィさん！あの人はアシスタントではありませんから。
今アシスタントしてくれてるのがこちらの、シーナ」

ギルバートは工房の玄関で待ちぼうけのシーナに目を向ける。

「なんだ、ちんちくりんじゃねえの」

「なっ、失礼ですよ！？」

シーナは顔を真っ赤にして怒りだす。

「がきんちょで色気もねぇーアハハハハハ」

「トっ…トッドぉ……」

シーナは涙ぐむ。

「ギルバート、言いすぎです…」

「あぁ悪い悪い。」

シーナはトッドの元に駆け寄り、裾を引く。

「トッド、何者なんですか！？こんな派手で失礼な人がトッドの友

達だなんて思えません！」

「なんだと？」

シーナはトッドの後ろに隠れる。

「シーナ、確かにギルバートは少し口が悪いですが…。彼は、有名な探検隊の一員で立派な歴史学者なんですよ」

「学者！？」

トッドの後ろから顔だけ出しておそるおそるギルバートを覗く。

ギルバートは照れ臭そうに頭をガシガシと掻く。

「一応な…。マーズ・クリーク探検隊っていうところで、海底とか、大陸とか回って失われた文明の痕跡調べてんだ。
そしたら、人が住むには不可能な場所に、王国が存在して…確かに文明のあった痕跡が残ってたりするんだよ。
俺は、その失われた文明を生きていた人類の為に、生きてたって痕跡を残してあげるために、探検隊に入って研究してんだよ」

「へぇ…」

シーナは真剣な表情で語るギルバートに、いつの間にか目を奪われていた。

「まだまだ解明されてない事はたくさんある。空白の歴史を俺は追

求し続けていきたいんだよ。分かるかちんちくりん」

「ちょっ…そのちんちくりんて呼び方やめてください！」

「あー悪かった、うちの探検隊…女がいねーから扱い方分かんねぇんだよ。」

シーナは腑に落ちないながらも、それ以上文句は言わなかった。

「シーナ、家でお茶の準備をしてきてもらえませんか？」

「あ、はい！」

シーナはお茶の準備をしに工房を出ていった。

シーナが出ていったのを見計らったかのようにギルバートの表情は曇る。

トッドはデスクに向かい、作業の仕上げを続けていた。

「何も聞かないのな…いっつも」

「僕は、あなたを友人としていつも招いてるつもりです。ここにお茶だけ飲みに来たって構わないと思っていますから」

トッドは柔らかな笑みを見せ、椅子ごとギルバートの方に向き直る。

「友達だよ。土産話だってたくさんある、お前に聞かせたい話もな…でも悪い、今日は…客として来た。」

「そうですか。いいですよ、僕で力になれるなら、お受けしましょう」

その後シーナがお盆に3人分のお茶を用意し、3人は長椅子に着席した。

「これなんだけど…」

ギルバートが取り出したのは、透明の小袋で保護された1センチほどの紙切れだった。紙は少々黄ばみがあり、古さが伺えた。

「何ですか？これ」

「こんな小さな紙切れだけど…元は写真だったんだ。擦り切れて破けてさ…残ったのはこれだけになっちまった。」

「写真…ですか。」

「トッド、この写真…復元出来ないか？」

「……」

トッドは写真の切れ端の入った小袋を手にとった。

「えぇ、この写真を、ギルバートの記憶から復元する事が出来ます。」

「やった！記憶なら任せろ。完璧に覚えてるから…頼む、俺には時間がないんだ」

ギルバートは苦しそうな表情で訴える。

「時間…？」

「実はな…俺の目、もうすぐ見えなくなるんだ。」

「え…」

トッドとシーナは思わず動揺する。

「変な病気、貰っちまったみたいなんだ…。薬と…このサングラスで強い光から目を守ることで
進行を遅らすことは出来るけど…もう治らないみたいでさ…。
いつか光を無くす前に…この写真をしっかり、目に焼き付けておきたいんだ。」

「いつから？」

「ん？たしか…4ヶ月ほど前だったかな。そんな深刻な顔すんなって。
まだ視力も落ちてねぇし、いつ見えなくなるかは分かんねぇんだからさ。」

「…シーナ、少しの間、席を外してもらえませんか」

「はい」

シーナは冷静にトッドの指示に従い、席を立ち工房を出る。

工房にはトッドとギルバートの2人、しばらく静寂が工房を包む。

「進行は…早いんですか？」

「分からない…いきなり見えなくなる可能性もあるんだと。参ったよ…」

「探検隊は」

「失明したら…辞めるつもりだよ。自分の目で証明出来なくなるなら、あそこにいる意味はないよ」

「……だけど、そしたらギルバートこの先」

「ま、の～んびり実家の農家でも継ごうかね。」

「……」

トッドは俯き黙り込んでしまった。

そして顔をぐっと上げるとトッドはダムが決壊したように喋りだした。

「誰か…治せる医者は？僕の知人に有能な医者がいます、それに医者の知り合いならたくさんいます。
何か治せる方法、僕も探してみます。病名は？もし知られてる病気だとしたらきっと何か」

「もういいって、トッド。」

ギルバートは指を突き出し制止させる。

「…ギルバート、貴方は僕の大切な友人です。あの時…友達が一人もいなかった
僕の唯一の友達になってくれた。あの恩を僕は何も返せていないんです。」

「んな事言うなよ。恩を売りたくて俺はトッドと友達になったわけじゃないぜ？
とにかく、写真。直してくれたらそれで十分だよ。頼むな」

「……1時間したら、また来て下さい」

「ん～、1時間じゃ船止めてあるトコの宿まで帰れないな。家で待たせてくれよ」

「えぇ、構いませんよ？今回は準備は一人で事足りますし。シーナにお茶を用意するよう頼みますね。家で待っててください」

「助かる！」

トッドを工房に残し、ギルバートとシーナはトッドの家の方でお茶

をしながら1時間過ごすことになった。

「なぁ、ちんちくりん」

「・・・・・」

「んな怖い顔すんなってシーナちゃん」

「なんですか？」

シーナはぶすっとした表情で紅茶の砂糖をティースプーンでグルグルかき混ぜる。

「同居してんだろ？トッドのこと、どこまでもう聞いたんだ？」

「・・・なんにも、知りません」

シーナの顔が先ほどに増して険しくなる。

「そっかぁ。ほんとに心閉ざしちゃったんだなあいつ・・昔は可愛らしかったんだぜ？まぁ、多少は人見知りだったけど」

シーナはティースプーンを動かす手をとめる。

「知ってるんですか？昔のトッド」

「まぁ、少しの間だけどな。俺もすぐ探検隊入ってアイツと離れたから」

「どんな人だったんですか？」

「ん？可愛かったぜ・・あれは、アイツがまだ7～8歳だったけな。俺が１０歳」

「ほぼ１０年前じゃないですか！」

シーナは目を輝かせる。

「アイツ、箱入り息子だったんだよ。通ってた学園でもバリバリの職人魔法士特待生。エリート街道まっしぐらの天才だったんだ。」

「え・・・？」

「だから職人だよ、あいつ元職人魔法士なんだぜ？」

「・・・・・トッドが、元職人魔法士・・」

シーナは神妙な顔つきで俯いた。

「あ・・、言っちゃまずかったかな」

シーナは首を振る。

「いいえ？続けて」

シーナはにこりと微笑む。

「ん～、詳しいことは俺も話せないんだけど。とにかく才能に満ち溢れて国中から期待の星だって言われて。
そのせいで・・友達が出来なかったんだよ。妬まれたり、敬遠されたり。
学校に通ったって言ったって、特別個別クラスとかいって部屋に独りきり、孤独なもんだよ。」

「そんな、エリートなトッドと、どうやって知り合いに？」

「ん？それはな、アイツの個別クラス、元々使われてない学園の書庫だったんだよ。
生徒でも何でもない俺は、窓からそこに侵入しては本読んで歴史の勉強してたわけ。
だって誰も来ねぇし、セキュリティも甘かったからさ。そしたら来たんよ、小せぇトッドが」

ギルバートはシシシッと笑う。

「それが出会いなんですね！」

「詳しくはアイツから聞きな。
とにかくその書庫であいつは職人の勉強、俺は隠れて歴史の勉強。
先生の目を盗んではたっくさん話したり、抜けだして外に遊びに行ったり。
仲良かったんだぜ？俺たち」

「へぇ～」

しばらく昔話に花を咲かせていると、準備が出来たとトッドが迎えに来た。

工房に行くまでの間、シーナはトッドの顔を見つめていた。

「・・・・・・・・・・」

「シーナ、どうかしました？僕の顔、何か付いてます？」

「いっ、いいえ？何でもありません」

「そう、ですか」

「トッド、シーナは聞きたいことがあったって、トッドから話してくれるの・・待ってますからね！」

シーナはにこりと微笑むと、工房まで先に駆けていく。

「ギルバート・・なんか余計なこと喋っちゃったみたいですね・・まったく」

トッドは深くため息をついて、重い足取りで工房へ向かった。

3人が工房へ着くと、いつもの様に黒い煉瓦の空間に魔法陣が敷かれた部屋へギルバートを導いた。

「今回の魔法はいたってシンプルです。

ギルバートに、水晶を持って魔法陣の中心に立ってもらいます。
それで、この白い大きなスクリーンにギルバートの記憶の中にある写真を映し出します。
その映し出された映像を・・」

トッドはポケットから、何も映し出されていない1枚の写真を取り出した。

「あの小さな紙切れからここまで写真を復元させました。
この時点ではまだ何も映っていません。
ここからが本番、白いスクリーンに映し出された映像をこの白紙の写真に写し取って完成です。」

「へぇ～凄いな・・トッド」

「始めましょう、ギルバート。その水晶を前に突き出して」

「こうか？」

ギルバートは白いスクリーンに向かって水晶を突き出す。

「シーナ、蝋燭を持ってギルバートの後ろに回ってください」

「はい！」

シーナは両手で蝋燭を持ち、ギルバートの後ろに回る。

トッドは手から青白い炎を出すとシーナの持つ蝋燭に灯す。

すると蝋燭の光はギルバートの身体、水晶を突き抜け光が反射し白いスクリーンに映像が映し出された。

「よし。」

トッドは白紙の写真を、手でごしごしと擦り始めた。

すると擦られた部分からスクリーンに写った映像と同じ画像が浮かびだした。

しばらく擦り続けると、写真にはスクリーンと全く同じの画像が映し出されて完成した。

「出来た・・」

トッドがそう呟くと、部屋が元の工房に戻った。

ギルバートはゆっくりトッドに近づくとそっと写真を受け取る。

「完全に元通りだ・・、よかった。またこの写真が見られて」

ギルバートの目からうっすらと涙がこぼれた。

シーナがギルバートの写真を覗き込む。

するとシーナは目を丸くして呟いた。

「その女の人・・たしか」

シーナはそう呟くと工房の出口へ駆けていく。

「シーナ！？何処行くんです？」

トッドが呼び止めると、シーナはくるりと振り返る。

「２人とも、ここにいてください。会わせたい人がいるんです」

そう大きな声で言うと、シーナは一目散に工房を出て丘を下って行った。

「行っちゃいましたね・・」

「なんだよ、会わせたい人って」

３０分ほど経っただろうか。

シーナが工房へ戻ってきた。

「２人とも、外へ出てください。」

シーナは真剣な表情で2人を外へ呼びつけた。
すると、外はすっかり夜になり月がぼんやりと外を照らしている。
すると、家の柵の外に、1人の女性が立っている。
「暗くてよく見えません・・」
「・・・」
ギルバートはおそるおそる柵の外へ近づく。

「ギルバート・・・貴方なのね」
女性はギルバートの名を呼んだ。
その声にギルバートはハッとする。

「・・マリア？」

「シーナ・・あの女性。もしかして」

「えぇ、写真にいた女性です」

復元した写真には、今より数年ほど若いであろうギルバートと、ある女性が2人で映されていた。

その女性がいま柵の外に立っているのだ。

「マリア・・なんで・・、どうしてここへ？」

「研究員の人に聞いたのよ。最近、ある友人に会いにここにくるって」

「・・・マリア・・。俺たちもう・・」

「えぇ、5年前に別れたわよ？」

「俺・・別れた後もずっと・・ずっとマリアの事ばかり、マリア、俺、ほら、この写真
2人で撮った写真。古くてボロボロになったから修理屋に復元してもらってずっと大事に・・
でも、会いたくて・・本当はずっと会いたくて」

マリアは柵を出たギルバートを優しく抱きしめた。

「あの時は・・貴方が旅ばかりして会えないことがつらくて寂しくて・・別れを告げたけど・・
私も、ギルバートの事ばかり考えてた。同じね」

「・・・・・・マリア、実は俺、病気にかかっちまってさ・・
いつか目が見えなくなってしまうんだ。」

「うん、隊長さんに聞いた。大変だったわね。目が見えなくなったら、探検隊も辞めるって言ったみたいね」

「・・・うん。情けないよな、こんな終止符の付け方。」

「辞めた後は、どうするの？」

「実家の農家・・継ごうかな」

マリアはギルバートの髪を優しく撫でながらクスッと微笑んだ。

「それいいな。私もついていこうかしら」

「え？」

「だめ？」

「・・その時俺は、目が見えてないんだぜ？
それに、また別の病気持って帰ってきて、もっと大変なことになってるかも・・
そんな・・そんな俺になんてついてきちゃだめだよ」

ギルバートの声は僅かに震えていた。

「大丈夫よ。2人ならきっとなんとかなるわ。
それに私は、ギルバートがどんなハンデを背負ってたって

そんな理由で離れたりしないわ？
ギルバートはギルバートじゃない、違う？」

「おれ、目が見えなくなるまではまた旅に出る・・・それでも・・・待っててくれるのか？」

「見くびらないで。私たち5年も離れてたのよ？いくらでも待てるわよ」

「マリア・・」

ギルバートはマリアを、強く抱きしめる。

マリアの華奢な肩に顔をうずめて、ギルバートは大声で泣きじゃくった。

「もしかしたら、この写真はもう必要ないかもしれませんね」

「そうみたい、ですね」

トッドとシーナは工房の玄関で二人の様子を眺めていた。

「いい話ですね。どんなハンデを抱えてたって彼が彼であるのなら愛せるなんて」

「そうですね、素敵ですね・・・！」

ふとトッドの横顔に目を向けると

トッドはまるで、母親に置き去りにされた子どものように、酷く悲しそうな表情をしているように見えた。

「っ・・・」

シーナは声をかけることもできなくなった。

「・・・シーナ？」

「は・・はいっ？」

「やっぱり、僕の顔何か付いてます？」

「いいえっ？」

シーナはその酷く悲しそうな表情は気のせいだと自分に言い聞かせた。

第八話　【泥酔】（前書き）

前回に続いてトッドの過去について少し触れていきます。
依頼人が出てきませんが、もう少しお付き合いください。
今までと少し話の雰囲気が変わってきていますが
２人の仲が縮まっていく様子や明らかになっていくトッドの
過去を楽しんでいただけたらと思っております。

第八話　【泥酔】

連れてこられたのは広い書庫だった。

「今日からあなたの特別な勉強部屋よ。」

ロココ装飾の学園図書館書庫。
赤じゅうたんの敷き詰められた床。
古い書物が整然と並べられた空間に、ちょこんと置かれた勉強机。

「ここに・・僕、1人ですか？」

「トッド、あなたはもっと自覚しなくちゃ。あなたは、特別な子なのよ？」

気味の悪い笑顔だった。

そして書庫の奥へと手をひかれ、勉強机の前まで連れていかれる。

「毎日、昼と夕刻に様子をみにきますから。」

「はい、ミス・ヒラリー」

相変わらずの気味悪い笑顔で、ミス・ヒラリーという教師は去って行った。

大人しく机につき、教科書を開く。

掛け時計の音のみが規則的に鳴り響く書庫。

だだっ広い空間なのにひたすら息苦しい。

「はぁ・・」

思わず教科書に顔をうずめる。

「…おい、なぁそこの！」

人の声がする。
ここには自分しかいないはず。

「・・・？」

「こっちだよ、こっち」

奥の本棚の方から声がする。
おそるおそる声の聞こえる方に近づいていく。

「だぁれ…？」

本棚から自分より少し年上だろうか、1人の少年が現れた。

「よ、俺、裏の農家の息子のギルバートってんだ。」

「せ・・生徒じゃ…ないの？」

少年は制服のブレザーを着ていなかった。

「おぅ！だって俺職人じゃねーもん。ここの書庫、誰も使ってねぇから忍び込んで本読んでたんだ」

書庫の奥の小窓を指差して、謎の少年ギルバートはシシシッと笑った。

「そうなんだ」

つられてトッドにも笑みがこぼれる。

「お前生徒なのに何でこんなトコで1人で勉強してんの？」

ギルバートはひょいっと机に飛び乗る。

「僕もよく分かんない…、特別なんだって。みんなより難しい勉強だからって。」

椅子ではなく机に座ったことのないトッドは戸惑いながらも、椅子に着席した。

「特別なんだ、すっげ！エリートじゃん羨ましい！」

「よくないよ…、いつも独りぼっちだもん。みんな僕の言ってない事で噂したり…嫌われてるんだ」

トッドは足をプラプラさせながら口を尖らせてつぶやいた。

「なんだそれ、くっだらねぇー！ただの嫉妬だよ。」

「しっ…と？」

トッドは首をかしげる。

「嫉妬っていうのは、自分より頭がいいとか特別だとかいう奴に、羨ましくて腹立てたりすることだよ。」

「凄い、大人の使うような言葉、よく知ってるんだね！」

「本読んでたら覚えるよ！俺もっと色々知って、いずれは学者になって探検隊に入るんだ！」

ギルバートは得意げにそう言うと机から飛び降りた。

トッドもつられて立ち上がる。

「探検…隊？」

「そう！マーズ・クリーク探検隊だよ！世界中を旅して回るんだ、俺も学者になって探検隊に入るんだ！」

ギルバートは書庫を走り回り目に付いた本を本棚から抜いていく。

トッドはバタバタと走り回るギルバートに必死についていく。

「凄い、学者さんになりたいんだ。ねぇ、何の学者になるの？」

トッドはようやく足をとめたギルバートに追いつき、少し息を切らせながらも

目を輝かせて聞いた。

「何のって……やべ、まだ決めてねぇ」
大量に抜いた本を眺めながらギルバートはペロリと舌を出した。
「プッ、アハハハハ」
「おっかしいよなぁ。な、ここさ。俺もこれから使いたいんだけどいいか？」
ギルバートは、ここに入ってくる時に使った小窓にもたれる。
「うん！いいよ、先生は決まった時間帯にしか、ここに来ないもん！僕も君がここに来てくれたら嬉しい！」
「やった、じゃあ遠慮なく来させてもらうよ。そうだ、お前名前は？」
ギルバートは小窓を開き、足をかけた状態で振り返った。
「トッドだよ！僕の名前はトッド！」
「トッドか、年は？いくつ？」
「８歳！」
「俺１０歳、年上だな。ギルバートだ、よろしく」
「よろしくギルバート！」

「んじゃーな！」

ギルバートは小窓から飛び降りて窓の外から顔だけを出す。

「ねぇ、ギルバート！」

「ん？」

「僕と・・友達になってくれる？」

ギルバートは、きょとんとした後、シシシッと笑う。

「当たり前だろ？もう友達だよ。またなぁー！」

ギルバートは大きく手を振り、学園の柵をあっさり飛び越えて行った。

「トッド、トッド！」

「ん……？」

「そんなところで寝てちゃ風邪ひきますよ」

気がつくとそこは工房で、顔をあげればシーナが毛布を持って立っ

ていた。

「いま・・何時？」

「17時です」

「17・・まずいっ！先生が見回りに」

トッドが慌てて立ち上がるとシーナは驚くと同時に笑いだす。

「トッド、まだ寝ぼけてるんですか？今から夕食の準備しますから、もう、うたた寝しちゃだめですよ」

シーナはクスクス笑いながら工房を後にする。

「・・・・」

トッドはバツが悪そうに頭を掻いてふと自分の作業机に目をやると古い本が広げられていた。

「これのせいか」

トッドは苦笑しながらその本を本棚へと戻した。

「さて・・と。もう一仕事」

トッドはぐぅっと伸びをして再び仕事に取り組んだ。

その日の夕食が過ぎて

「トッド、今日はちょっと買い物帰りにいいもの頂いちゃいました」

「嬉しそうですね、何ですか？」

シーナは嬉しそうに冷蔵庫から可愛くラッピングされた小袋を二つ持ってきた。

「青い小袋が、トッド。ピンクの小袋が、私。」

「なんですか？これ」

トッドは青い子袋を受け取る。

「買い物帰りにリリィさんに頂いたチョコレートです。デザートに食べたらって」

「へぇ～、次会ったらお礼しないといけませんね」

トッドは袋から、細長く棒状のチョコレートを取り出す。

「じゃあ、いただきま・・・」

トッドは自分がチョコを食べようとする姿を凝視するシーナに気付き手をとめる。

「シ・・シーナ？」

「あっ・・すいません！どうぞ気にせず食べてください」

「・・いただきます」

不審に思いながらもトッドはチョコレートを口にした。

「うん、美味しいですね」

「さ！どんどん食べちゃいましょ、私もいただきまーす」

シーナはトッドをみて少しニヤニヤしながら自分もチョコレートを口にする。

数分後、２人はあっという間にチョコレートを完食。

「じゃ、私洗い物してきますね」

「うん・・・。」

シーナはいそいそと台所に向かい、そこからトッドの姿を覗き込む。

テーブルでぼんやりとしているトッドの顔は少し赤くなっていた。
「やっぱり、酔ってる。あんな微量のアルコールなのに・・・。
どうしよ、本当に酔わせちゃった、私のチョコにはアルコール入ってなかったからな。」

実はリリィにもらったチョコレートには微量のアルコールの含まれたチョコレートだった。
しかしシーナのチョコレートにはアルコールが含まれていない。
リリィの悪戯で、買い物帰りに渡されたチョコレートだった。
ちなみにここでは成人は１８歳とされているためトッドはお酒を飲める年齢である。

シーナはトッドがお酒に酔うとどうなるのか気になり
リリィの誘いに乗ったのだった。

早々に洗い物を終えるとシーナはゆっくりトッドに近づいた。
トッドは顔を真っ赤にしてテーブルに突っ伏していた。

「トーッド、大丈夫ですか」

「ん～・・、なんかいますっごく気持ちいいんです。」

「あはは、それはいいですね」

シーナはテーブルに突っ伏すトッドの向かいに座る。

「こんな、ゆ～ったりした気分、久しぶりだなぁ・・・。うん・・
１０年ぶりくらい・・」

「へぇ～」

「昔っから・・、人の目がずっと怖くて、学校にいる時なんて・・、
もう生きた心地しなかった」

「・・・そんなに？」

「当たり前だよ・・もう皆・・人の目なんかじゃなかった。
同級生からは妬まれて・・・先生や大人からは不気味に優しい目
をされて・・。
その目がすぐに冷たい目に変わるんだ。怖かったなぁ・・」

「トッド・・？」

シーナは焦っていた。
このままじゃトッドがいつかちゃんと話すと言ってくれた事を
お酒に任せて全部話させてしまう。

「肩肘張って・・ひたすら腕を磨いてた。
何のためにとか、楽しいとかつらいとか何にも考えてなかったなぁ・・・。
もうとにかく自分が存在してるんだって周りに思わせることに必死だった・・・・・。
うん、今思えば・・あの頃はその為に自分が職人でいようとしてたのかな・・」

「トッド・・もういいよ」

「ギルバートがいたあの短い間だけは・・・ただの子どもでいられた。
ほんとに短かったけどね。
悲しい話だよ・・ギルバートの読んだ本を自分も読んで寂しさ紛らわせてさ・・
今でもその本持ってたりして。
ほんっと、あの時は一人じゃ乗り切れなかった」

「もういいよトッド、もう寝よ？」

シーナは立ち上がる。

「戻れるのなら・・もう一度職人に戻れたらまた・・
みんな僕のこと見てくれるのかな・・・。
それなら凶器だってなんだって・・・・」

「トッド！」

シーナがトッドの肩に触れたその瞬間
ぐっと強い力で手を掴まれて引き寄せられた。

「トッド・・！？」

「シーナは・・こんな僕でも見てくれますか？」

「え・・？」

「もう何も作れない僕でも・・ちゃんと・・見てくれますか？」

「当たり前ですよ、トッドどうしたんですか？」

「・・・・・・」

耳元で寝息が聞こえる。
急にズシッと体重がかかりシーナはトッドに抱きつかれたまま転倒。

「ちょっ・・起きてくださいトッド。ベッドで寝なくちゃ・・。ねぇトッド、トッド！！」

その日の朝まで、トッドが目を覚ますことはなかった。

第九話　【スカウト】（前書き）

今回初めて、トッドとシーナの想いのすれ違いから
2人がケンカしてしまいます。
シーナとトッドのお互いを想う切ない心情を
感じていただければと思います。

第九話　【スカウト】

「頭イタ……っ」

昨日のお酒入りチョコでそのまま眠ってしまったトッドは頭痛とともに目を覚ました。

「シーナ、おはようございます」

「おはようございます……」

朝食の準備をしていたシーナが振り返るとその表情は暗くトッドは目を丸くする。

「…なんて悲壮な挨拶…。あの、僕昨日チョコレート食べてから後の記憶がなくて…シーナ何か」

「うっ…」

「う？」

「うわぁぁぁぁぁん」

シーナは大粒の涙を流し号泣した。

「シっ…シーナ！？」

トッドは頭痛も忘れ思わずシーナに駆けよる。

「うぇぇ…んっ…うっ…うぅっ……」

「これまた…豪快な泣きっぷりですね。まったく、あなたは本当に無邪気といいますか…急に泣くと心配してしまうでしょう？」

「うぅ～～」

「お料理してたと思ったら、泣きべそかいて工房に来て、指切って大騒ぎ。今日にいたっては、何が何だか分かりません。困ったものですね」

「だってぇ～……」

トッドは自分の服の袖口でシーナの涙をぬぐう。

「はいはい、涙拭いて。呼吸整えて。ニッコリして」

「……っ…ひっく……出来ませんよ…」

「いつも出来てるでしょう？何があったか分かりませんけど…僕の1日の始まりは今や、シーナがニッコリ笑顔でおはようって挨拶してくれる事から始まるんですから。あーんなこの世の終わりみたいな表情で朝の挨拶されたんじゃ僕の1日どうなる事やら。」

「ごめんなさい」

「違います、おはようっ、ね？」

「っ……」

シーナはぐっと唇を噛みしめてしばらく俯く。

「シーナ、おはようございます」

「おはようございます！」

シーナはニコリと笑顔で挨拶を交わす。

「上出来です。さ、朝ご飯いただきましょうか…」

ジリリリリーーーーーーーー

突然家の電話が鳴る。

「僕が出ます」

トッドは廊下に出た。

シーナは引き続き朝食の準備を行う。

数分後、トッドが戻ってきた。

「シーナ、とてもいいニュースです」

「なんですか？」

シーナは朝食をテーブルに並べ終えると、トッドに駆けよる。

「いま、シーナの学園からお電話をいただいてですね。
なんと、シーナをスカウトしたいっていう職人が学園に連絡をしてこられたそうなんです！」

「え・・・・」

「念願の職人の右腕ですよ、シーナ！」

「ちょっ・・ちょっ・・と待ってください！そんな、私」

「そうですね、突然のことに驚くのも無理はありません。
いやぁ、でもよかった。ちゃんと職人の右腕になれる道が見つかって
今日はお祝いしないといけませんね！
あ、詳しい日取りはまた追々連絡をと学園が」

「待ってくださいトッド！！」

シーナは怒鳴る。

「・・・・シーナ？」

「どうして？どうしてそんな連絡がここにくるんですか？」

「・・・実は、シーナがここに来る前に。学園の先生とお話ししたんです。
私は、職人ではありませんし、求人もリリィさんが無理を言って頼んでくれたみたいなんです。
だから僕、シーナがここに来てからも学園にシーナを職人の右腕として
雇ってくれるところを探してくれないか頼んでいたんです。
学園の卒業生のシーナには、やっぱりちゃんと職人の右腕になってほしいと思って」

「・・・・・・・・」

シーナの瞳からは再び涙がこぼれる。

「どうして、そんな悲しい顔をするんですか・・？」

「こっちが聞きたいです！どうしてそんなに嬉しそうなんですか！
どうしてそんな大事なこと隠したりしてたんですか！
どうして私の幸せを勝手に決めるんですか！
こんなの・・こんなの酷すぎます！あんまりです！」

「シーナ！？」

シーナは泣きながら家を飛び出していった。

「シーナ……」

家を出て追いかけようとする足が止まる。

ドアノブに手をかけ、そっと離した。

シーナは一目散に丘を下り、まっすぐリリィの家へ向かっていた。

呼び鈴を鳴らすと、リリィが玄関の戸を開く。

「シーナちゃん、どうしたの！？」

「…朝早くにごめんなさい…でも、でも」

「とにかく入って。温かいココア作ってあげるから。」

リリィはシーナを家へあげた。

泣きべそをかきながらシーナはリリィの作った温かいココアをすする。

「それで、何があったの？」

「トッドが…突然私をスカウトしてくれた、
その職人の右腕になったらって…。
トッドの工房を離れて…別の職人の右腕に…」

「トッドが、そう言ったの？」

「はい…」

リリィはコーヒーをすする。

「まぁ……トッドなら、そう言うかもしれないかな。」

「え…？」

「だって、最初から嫌がってたんだもの。自分に学園からアシスタントがつくこと。その子が可哀想だって。」

「可哀想？」

「トッドは、あなたがせっかく頑張って卒業したのに自分なんかのところにずっといるのは勿体ないって言ってたから」

「そんな事…言ってたんですか」

シーナはぐるぐるとココアをかき混ぜる。

「でも、1人にさせられないし私がアシスタントの求人を押し通したの。
それで、あなたが来たってわけ。」

「…私、確かに最初は…職人の右腕になろうって頑張ってたけど……
どんな職人の右腕になりたいか、どうしても分からなくて。
だからトッドに運命を感じたんです。」

「ならそれを伝えてあげたらいいじゃない？」

リリィはコーヒーを飲みほす。

「トッドは、とにかく今の自分をまるで欠陥人間なんだって言うみたいに蔑んでるの。
職人じゃないと生きてる価値がないみたいに。」

シーナは昨日のトッドの言葉を思い出す。

「……」

「それに今ごろ、家できっとシーナちゃんの事心配してるわよ？
探しに行きたいけど、そうするための壁を越えられずにね。」

「壁…？」

リリィはニヤリと微笑んだ。

「ね、私にいい考えがあるんだけど。トッドに迎えに来させるの、
協力してくれない？」

「…？」

その頃トッドは、まだ家の玄関で立ち往生していた。

「…もしかしたら、リリィさんの家に…」

ようやくトッドは動きだし、リリィに電話をかけた。

【もしもし？】

「もしもし、トッドです。あの…リリィさん。そっちに、シーナが訪ねてきていませんか？」

【いいえ、今日は家には誰も来てないわよ？】

「そ…うですか。あの、シーナがもし、そちらに訪ねてきたら連絡もらえませんか？」

【えぇ、構わないわよ？シーナちゃん、どうかしたの？】

「僕が…怒らせてしまったみたいで、出ていってしまったんです。」

【あらあら、ねぇシーナちゃんこの街の中にいるの？】

「…分かりません。」

【探しに行かなくていいの？シーナちゃん、迎えに来てくれるの待ってるんじゃないの？】

「……」

【可哀想なシーナちゃん。それがトッドの答えなら…シーナちゃん、愛想尽かせて二度と帰って来ないかもよ？】

「…だけど」

【ごめんなさい、私これから出掛けなくちゃいけないの。探してあげたいけど、出来そうにないわ。】

「そうですか…ありがとうございました。それじゃあ」

トッドは静かに電話を切った。

「……っ」

トッドは再び玄関扉のドアノブに手をかける。

「…迷ってる場合じゃないだろう、この臆病者」

トッドはドアノブを強く握り玄関扉を開くと

丘を駆け降りていった。

トッドが丘を降りて行ったちょうどその頃、

シーナは街の駅前に立っていた。

リリィに駅前から決して動くなという指示を受けたのだ。

「トッド……迎えに来てくれるかな」

シーナは、リリィの家を出る前に、リリィに言われたことが気になっていた。

【トッドがどうして、街に降りたシーナを迎えに来れないのか教えてあげよっか】

【…私が、ワガママで呆れたんじゃないんですか？】

【そんな事ないわ。むしろ、丘を降りる前に引き止めたらよかったって、今頃きっと後悔してるわ。】

シーナはますます混乱してきていた。

【トッドはね、自分の家や工房に訪ねてきてくれた人と、そこでしか上手く会話が出来ないの。
街に降りたら…誰ともほとんど口も聞けないのよ？】

【え…？】

シーナには初耳だった。
トッドが、街に降りたら人とろくに会話が出来ないことなど。

【特に人が多かったら尚更。視線が怖いんですって。無意識に威圧感に耐えられなくなって、動悸がするんだって】

【そんな…だっていつも依頼に来るお客さんとはあんな気さくに話せてるのに】

【家や工房が落ち着くからよ、きっと。】

【……】

【いい？日が沈むまでにトッドが駅に迎えに来なかったら…そのスカウトしてくれた職人のところに行きなさい】

【えっ！？】

シーナは戸惑う。

【遅かれ早かれ、この時は来たと思うわ。迎えに来ないようじゃ…いつか貴方達の関係だって崩れるわよ。そのくらいの信頼関係は必要だと思うわ。
いい？日が沈むまでにトッドが駅に迎えに来なかったら…。】

「そんなの嫌です…迎えに来てください…トッド…」

シーナは唇を噛みしめて、じっと待った。

トッドは丘を下り、住宅区に着いた。

「…シーナ、どこに」

キョロキョロしていると後ろから声がかかる。

「よぉ、トッドじゃねえか」

ビクリと肩をすくめ、ゆっくり振り返ると

そこにはクラウが立っていた。

「あ…、あっ…あの……」

「何だよそんな汗かいて」

「シーナ…見てませんか」

トッドの目はキョロキョロと動いていて

目の前のクラウと目が合っていない。

「見てねぇな、探してるのか？」

「はい・・、もし見かけたら工房に来るように伝えてもらえませんか・・」

「分かった、任しときな」

「ありがとう・・ございます、それじゃ」

トッドは俯きながら逃げるようにクラウのもとを去って行った。

「相変わらず怖がりやがって・・・、まだ安心させてやれねぇんだな」

クラウは寂しそうにトッドの後ろ姿を見つめていた。

それからトッドは何人も巡り、シーナの居場所を聞き出す。

次第に激しくなる動悸に流れる汗で、もう走って探すことは出来なくなっていた。

日も暮れかけ、街を夕日が照らしていた。

「まさか・・・電車に乗ったんじゃ」

トッドは胸を押さえながら駅前に着いた。

「・・・っ」

トッドは迷っていた。

この駅前で一人ずつシーナの行方を聞いていたら日が暮れてしまう。

それにもう街にもいないかもしれない。

トッドはぐっと胸を押さえながら息を大きく吸った。

そして大きな声で叫ぶ。

「シーナ！お願いです、いるなら出てきてください！
ちゃんともう一度話しましょう！
何も話さなかった僕が悪かったです、だから・・」

息が詰まる。

自分に視線が集まることが分かり威圧感がかかる。

それでもトッドは続ける。

「シーナ、シーナ！聞こえませんか、出てきてください！
こんな別れ方・・、したくないんです！
返事をしてくださいシーナ！！！」

「はい！！」

トッドは声のする方へ振り返る。

そこには、涙を流したシーナが立っていた。

「・・また、泣いてる」

トッドは膝から崩れ落ちた。

「トッド！」

シーナは慌てて駆け寄った。

「よかった、出て行ったのかと思って・・ほんとに心配して」

「トッドに何も言わずに出て行ったりなんかしません！
ごめんなさい、こんなことして」
「僕の方こそ・・シーナには職人の右腕になる方が幸せと思って
何も聞かずに、すみませんでした」
「学校には私が電話して断ってもらいます。
私はこれからもトッドの右腕になるために頑張りますって言いま
すからね？
私はトッドに運命を感じてるんです！
いいですよね、トッド？」
「シーナがそうしたいのなら・・・僕にそれを止める理由なんてあ
りません。
でも、僕みたいな手の掛かる男なんかと一緒だと、苦労しますよ？
僕はまだ、シーナが悲しむくらい僕のそばにいたい理由が分かり
ません・・。
おお泣きして家を飛び出すくらいショックを受けた理由も・・僕
には」
「・・・・ゆっくりでいいじゃないですか。
理由がなくちゃ、トッドのそばに居られませんか？」
「それは違います・・・でも」
シーナはトッドの手を握り、勢いよく引っ張りトッドと立ち上がる。
「帰りましょ？夕飯の用意しなくちゃ」

「・・・、そうですね。そういえばお腹すいて・・なんかもうフラフラで・・それに、視界がユラユラぁって・・」

「ちょちょっ・・まだ倒れないで下さい！？家まで頑張ってください、肩貸しますから、トッドォ・・」

その日はシーナに支えられながら、いつもの倍に時間がかかって家路に着いたころにはすっかり日も暮れていた。

第十話　【ラスト・ワルツ】（前書き）

１０話です。
今回の依頼人はシーナに恋する男の子が主役です★
久々にホンワカな雰囲気を楽しんでいただければと思います。
いかが感じていただけるでしょうか。

第十話　【ラスト・ワルツ】

「ダンスパーティですか」

「どうしましょうトッド」

「もちろん、行った方がいいと思いますよ？」

「…そう言うと思ったんですよ……」

秋も深まり街路樹は鮮やかな紅色に葉を染め
寒さも増してきたころ。

シーナはある男からダンスパーティの誘いを受けていた。

その日の夕食を終え、２人ともリビングで一服していた。

「だって、ダグ君とは私挨拶しかした事ありませんし、全然知らないんですよ？」

「優しくていい子ですよ？年だってシーナと同じですし、一生懸命カボチャも育ててておられて」

「でもでも、ダンスパーティの相手が初対面に近い私じゃあ、不釣り合いじゃありません？」

「社交的ですし心配いりませんよ、このまえ修理した耕具を引き取りに来た
カボチャ農家の方もいい子だって」

「カボチャしか愛せないんじゃないですか？」

「立派でしょう、あんな若くて立派なカボチャを」

「あぁーー分かりました！カボチャを愛する人に悪い人はいませんもんねっ、
トッドもカボチャお好きですし、そんなにカボチャの味方するんだったら
シーナこれから一生カボチャ料理作りましょうか？トッドなんてカボチャの波に
溺れちゃえばいいんですよ！カボチャに埋もれる夢みてうなされちゃいますよきっと！ふんっ！」

シーナは頬をぷっくり膨らませ、ズンズン大きな足音を立ててリビングのドアを乱暴に開け、出ていった。

「…カボチャの味方したつもりは…ないんですけど」

トッドは呆然としながらポリポリと頭を掻いた。

なぜこんな会話になったかというと。

この日の昼間、シーナは先日耕具の修理を依頼していたダグという

青年にダンスパーティに誘われたのだ。
ダグは街のカボチャ農家の一人息子である。
誘いを受けたその日の翌日
まだシーナは不機嫌だった。

「シーナ、何をそんなに怒ってるんですか？」
「トッドが…カボチャとダンスパーティ行けなんて言うから」
「いや…カボチャと踊れなんて言った覚えは……」
「それに私、ドレスも持ってません。」
「それなら、朝方速達で届きましたよ、綺麗な青のロングドレス」
「……」
シーナはじゃんけんに負けた子どものような、悔しそうな表情をみせる。
「ダグ君は、一番シーナに似合う色、頑張って選んだんでしょうね。この鮮やかな青、きっとよく似合いますよ？」
「……」

今度は頬が赤く染まる。

「わ…私、踊ったことありません。」

「それなら・・少しなら、お教え出来ますよ？」

「トッド、踊ったことあるんですか！？」

「昔、たしなむ程度ですけどね。基本的なステップさえ覚えたらあとはダグくんがリードしてくれると思いますし。
さ、仕事仕事。今日も頑張りますか！」

トッドは素知らぬ顔で工房へ向かった。

その日の夕刻。

「あの、トッド」

「はい？」

シーナはもじもじしながらトッドにつぶやいた。

「ダンス・・教えてくれませんか？」

「僕でいいなら、少しなら。それじゃぁ・・ちょっと待っててください」

トッドはリビングの戸棚から古いオルゴールを取り出した。

「わぁ、可愛いオルゴール」

「街の子どもからお礼にって、頂いたものなんです。ちょうどいいのでこれで覚えましょうか」

トッドはゼンマイを巻き、オルゴールを鳴らす。

「ワルツだ。」

ゆるやかな3拍子で音楽が流れる。

「とりあえず、曲付きで踊れるのはワルツしかないので。
じゃあ、シーナの左手を僕の右腕に置いて」

「こう、ですか？」

「そうそう、次に右手で僕の手を握って。」

「は・・はい」

シーナはトッドの左手を握る。

「じゃぁ・・ちょっと失礼します」

トッドの左手がシーナの肩甲骨へ触れる。

「・・・・っ」

今までになく近いトッドとの距離にシーナは顔を赤らめる。

オルゴールは一定の3拍子を刻み続けてゆったりと流れる。

「ゆっくりでいいですからね。
まずカウント1で右足を・・・」

ゆったりとした音楽に乗せてトッドのレッスンが始まった。

何度か足を踏んでしまうも、なんとか時間をかけてシーナはステップを覚えだした。

オルゴールを何回か巻きなおし、数十分が経った。

「疲れたぁ〜〜」

シーナはへなへなと倒れる。

「お疲れさまでした」

まったく疲れを見せないトッドはテーブルの水の入ったグラスを持ち、飲み干す。

「トッド、上手ですね、ダンス。」

「経験未経験の違いですよ、シーナも上達が早かったですし、これならきっとダンスパーティも大丈夫です」

「ん〜・・」

シーナは不服そうな表情を見せる。

「まだ、行きたくありませんか？」

「そういうわけじゃありません、乙女の深刻な悩みなんです」

「・・・それは大変」

トッドは困ったようにシーナを見つめる。

「今日はありがとうございました、おやすみなさい」

「おやすみなさい・・。」

そして月日は流れて

ダンスパーティ前日。

シーナが買い物に出ていた時

「ごめんくださーい」

工房にある青年が訪れた。

「ダグくん、おはようございます」

工房に訪れたのはダグだった。

ダグはトッドに古い靴を見せて出す。

「これは・・ダンス用に？」

「シーナちゃん、きっと靴も持ってないだろう？
あのドレスもトッドさんに綺麗にしてもらったんだ。
この古い靴も、綺麗にしてもらえない？」

「任せてください、綺麗に修理いたします。すぐに終わりますので、
そこにかけていてください。」

ダグは工房の椅子にかける。

そしてトッドは靴磨きの作業に取り掛かる。

「ありがとう、お袋の古いドレスをあんなに綺麗に直してくれて。
新品のドレスなんて買えなくて・・」

「お安いご用です。シーナにきっと似合います。この靴も。」

「シーナちゃん・・迷惑がっているだろう？俺となんて、ほとんど
初対面に近いし」

「照れているだけですよ、それに・・ダンスが初めてだから戸惑っ
ているみたいです。
しっかりリードしてあげてくださいね」

「分かった！」

トッドは優しく微笑みながら入念に靴を磨く。

「出来た、新品同様ですよ」

「すげぇ、きっとシーナちゃんが履けば可愛いよ」

「貴方からって渡しておきますね。」

「お願いします、それじゃあ」

ダグは足取り軽く家路を急いでいった。

そしてダンスパーティー当日。

「どうです？似合いますか」

「とってもよくお似合いですシーナ」

シーナは青いロングドレスに身を包みリビングへ現れた。

「でもトッド、このドレスに合う靴が・・」

「あ、待っててください」

トッドは靴箱から昨日ダグにもらった靴を取り出した。

「わぁ、素敵な靴ですね」

「ダグ君の贈り物ですよ、きっとドレスによく合います。」
「なんだか・・楽しみになってきちゃった」
「それはよかった、ほらもう時間ですよ」
「大変、急がなくちゃ」
その時、家の外から声が聞こえた。
外には、タキシードを着たダグが迎えに来ていた、。
「シーナちゃん！迎えに来たよ」
窓に向かって手を振る。
「タキシードだと・・なんだか人が変ったみたい。」
シーナは意外そうに呟いた。
「お迎えに来てくれたんですね。紳士じゃありませんか。
シーナはストールを羽織り、外へ出ようとする。
するとトッドが引きとめた。
「ちょっと待って、外は今夜一段と冷えるみたいですから。僕のコート着ていってください。」
「わ・・いいんですか？ありがとうございます」

シーナはトッドのコートを羽織る。
襟元から木の香りがする。
「トッドの匂いだ」
「あ・・匂い気になりますか？」
「いえ、ありがとうございます！行ってきます！」
「楽しんできてくださいね」
2人は意気揚々とダンスパーティーの会場へと向かっていった。

会場に着きしばらくすると、楽団によるワルツが流れ出した。
「踊っていただけますか」
ダグが手を差し伸べる。
「よろこんで」
シーナはダグの手をとり、ワルツをゆっくりと踊りだす。

「今日は来てくれてありがとう。」

「私こそ、誘ってくれてありがとう。」

シーナはトッドに教えてもらった通りのステップを踏みなんとかダンスを成立させる。

「友達のツテでさ、俺みたいな畑の小僧にも最初で最後のダンスパーティーさ。
いい思い出残したくて君を誘ったんだ。」

「私を？」

ダグは上手くシーナをエスコートしながらダンスする。

「うん、ダンスの相手はどうしても君が良かった。
一目惚れだったんだ。
でもこれが最後、今日この時間でこの想いもふっきろうって決めてたんだ」

「・・・・・・」

「好きなんだろ？トッドさんが」

シーナは黙って頬を赤く染める。

「最初から分かってたんだけどね。
なかなかふっきれなくて。
だから今日が最後、君と踊れただけで俺は十分だよ。
この至福の時間が魔法みたいだ。０時になるまでの」

「シンデレラみたい」

「相手はカボチャ小僧だけどね」

2人はクスクスと笑う。

「ありがとう、私誰かに好きだって言われたの初めて。
ねぇ、こんな事許されないかもしれないけど・・・
これからも友達でいてくれない？」

「ほんと？」

「うん・・・・」

「やった、最高の気分だ。」

すると曲調が変わった。

「ジャイブだ」

「ジャイブ？ねぇダグ、どうしよう私こんな激しい曲踊り方知らないの」

ダグはニコリと笑うとシーナの手をぐっと引いてから外へ放す。

「スイングさ！腰振って腕振って楽しく踊りまくればいいんだよ！」

「そ・・そうなの？・・・よーし！！」

会場中踊れや歌えやの大騒ぎで夜は更けていき、あっという間に夢の時間は過ぎて行った。

「あー楽しかった！」

「ほんと、ダグのおかげですっごい楽しかった。」

ダグはシーナを家まで送り届けていた。

「シーナちゃんも大変そうだね、トッドさん鈍感そうだし」

「うん・・とっても鈍いから。苦労しそう」

「そのコート、トッドさんのでしょう？」

「やっぱり・・分かる？」

「それ着てる君はすごく幸せそうだ」

「えへへ・・・」

「頑張ってね、応援するよ」

「ありがと、カボチャの王子様」

「へぇ!?アハハハ、なんか微妙な響きだな」

「あら、カッコよかったわよ?それじゃあ、またね」

「おやすみ」

その夜、ダグはシーナの姿が見えなくなるまで一生懸命に手を振り続けた。

第十一話　【傷ついたカカシ】（前書き）

今回は、シーナの初仕事が訪れます！
シーナの初仕事の頑張りを見届けていただたければと思います！

第十一話　【傷ついたカカシ】

「ん……」

「腕の調子、悪いですか？」

「少し…。でも周期は伸びました」

工房の掃除を終えたシーナはトッドの腕を覗き込む。

トッドの腕の震えは定期的に訪れる。

薬の効果で症状の現れる周期は順調に伸びていた。

しかし腕の震えは治まるのに時間がかかり

その間はトッドは作業を中断しなければならない。

「でも、薬効いてるみたいでよかったですね！」

「はい…、ん～今日中にしてしまいたかったんだけど…そうだ、シーナ」

「はい？」

「やってみますか？修理」

トッドはニコニコ微笑み問い掛ける。

「私がですか！？」

「この前の嵐の影響で、耕具の修理や傷んだ柵の修理がたまってるんです。
少しでも時間を有効に使いたいですし…
それに、シーナがここに来てもう約2ヶ月経とうとしてます。
少しレベルアップしてみましょう」

シーナはごくりと息を呑む。

「…シ…シーナ頑張ります！」

「よし、それじゃあシーナには…こちらのカカシの修理をお願い出来ますか？」

トッドは工房の隅に置かれたカカシを持ってくる。

そのカカシはとても古く、木で出来た一本脚はへし折れ、腕はボロボロに腐れ、顔面の麦わらはボロボロに剥げていた。

「古い…カカシですね」

「どうしても新しいカカシにはしたくないらしいんです。
ギリギリまで、元の木やワラが全て交換しないといけなくなるまで、直したいと依頼を受けました。愛されているカカシなんです。
先日の嵐の被害で酷く傷ついたので、修理をと。」

「は…はい」

シーナの表情は固い。
「大丈夫、僕がそばについてます。
それに物をくっつけて研くのは、学園で習ったでしょう？」
シーナの肩がギクリと竦む。
「お…落ちこぼれだったんで…自信ないです」
「ん～…」
トッドは腕を組むと、じっと考えだした。
呆れられたかと思いシーナは気が気でない。
トッドはひらめいたとばかりに、戸棚を開き何かを取り出した。
「気休めかもしれませんけど、これ」
「このリボンって」
トッドが取り出したのは、青い一本のリボンだった。
「ほら、僕が髪をしばるものが無くて困ってた時にくれたリボンです。
これに、おまじないをかけましょっか。」
トッドは震える手を抑えながら、リボンに指先で文字を書く。

「何を書いたんですか？」

「上手くいきますようにと。言霊ってあるでしょう？
言葉には力があるって。特別な魔法なんてかけてませんけど
きっと上手くいくように願いを込めました」

トッドはそのリボンをシーナの手首に巻き、結んだ。

「出来る気・・してきました？」

「もう何でも出来そう・・」

「え？」

「いっ・・いえいえ、私頑張ります！」

シーナは抱きつくようにカカシを持ち上げた。

「それじゃ、用意を始めましょうか。シーナ、自分の作業道具持ってきてください。」

「はーい。」

シーナは家から学生時代の自分の作業用具を取り出し、急いで工房へ戻る。

「魔法陣の紙はこちらに用意してあります。
シーナ、まずは自分のクロスを持ってください。」

「はい！」

シーナは道具箱からクロスを取り出す。

「それと、これ。」

トッドは真っ白なテープを取り出した。

「何ですかこれ」

「仮止めテープです。
これから新しい木材やワラをくっつける作業に入りますが
それをしてる間は魔法陣の紙を加えていないといけません。
作業途中で一度でも離してしまったら、魔法が解けて全部1から
やり直しになってしまいます。
それを止めるのがこのテープ。
こまめに止めておいた方がいいと思いますよ？」

「分かりました、ありがとうございます！」

「それじゃぁ、始めましょうか」

シーナは工房の長机にカカシを置き作業を始める。
トッドはその向かいに座り、シーナの作業を見守る。

「魔法陣を加えたら、カカシの原型が見えるでしょう？」

シーナはうなずく。

「まずは足元から。やすりで古い部分を丁寧に削り取ってください。」

シーナはこくりとうなずくと、やすりでカカシの足元の古い部分を削り落す。

「ここで仮止めテープ」

シーナは削り落し終えた部分にテープを巻く。

「ふぅ・・あっ！！」

安心した瞬間にはらりと口から魔法陣の描いた紙が落ちる。

トッドはこらえていたがクスクスと笑ってしまっていた。

「テープ・・あってよかったぁ」

「でしょう？・・でも、あまりに予想通りといいますか・・ハハハ」

「笑いすぎですよぉ」

「あ・・失礼しました。続けましょう。

次はくっつける作業です。

基本的には、古い部分をとってはくっつけての繰り返しです。

ワラの部分は、新しいワラをクロスで持って撫でるように擦りつければくっつきます。

難しいのは、その感覚です。」

「はい！」

シーナは再び魔法陣を加える。

「シーナに見える原型に合わせて新しい木材をくっつけて
接着部分をクロスでこすってください。」

シーナは木材の接着部分を丹念に擦る。

「難しいのはここからです。
手の感触でしっかりくっついたか分かるはずです。
それを上手く見つけてください。
擦りすぎても、不足しても上手く接着しません。」

シーナがクロスを手放すと、新しい木材はポロリと落ちてしまった。

「甘かったみたいですね、もう一度。焦らないで感覚を掴んでいってください。」

シーナは深呼吸して再び作業に入る。

時間が経ち、シーナはだんだんコツを掴んできたようで
2時間かけてようやく手足の部分の修理が終了し
仮止めテープを巻き終えた。

「やった!手足出来ましたよトッド・・・あれ」

トッドは向かいで長机に突っ伏して眠ってしまっていた。

「・・・そりゃそうですよね・・、倍はかかってるんだもの。

よーーっし！あとはお顔だけ！
頑張っちゃうもんね」

シーナは作業を再開する。

ワラの接着作業も何度か接着を失敗しながらも

ついに仕上げへと入ってきた。

その時シーナはワラの奥にある印を発見する。

「これ・・まさか」

数時間が経ったとき。

「ん・・あ、すみませんシーナ僕眠って・・シーナ？」

目が覚めた時には日は暮れてすっかり夜になっていた。

机に置かれたカカシは綺麗に元の姿へと戻っていた。

しかしシーナの表情は暗い。

「どうしたんですか・・？カカシはしっかり直ってるようなんですが」

「トッド・・どうしても直せないんですか？」
シーナは震える声で呟いた。
「何を・・ですか？」
「カカシのワラの中に・・職人魔法士の魔法陣がありました・・
でも、ボロボロに擦り切れて、もう原型をとどめていませんでした」
「・・・そうだったんですか」
トッドは状況を理解した。
「このカカシ・・生きてたんですね。きっと、話せたんでしょう？」
「・・シーナが、悲しむかと思って黙っていたんです。
その通りです、このカカシはかつて生きていました」
「・・・嵐で亡くなっちゃったんですか」
「全部・・・話した方がよさそうですね」
シーナはぐっと涙をこらえて、トッドと向き合う。
「先日、街にこのカカシを引き取りに行った時に、僕もこの魔法陣を見つけました。
カカシの持ち主の農家の旦那様は、去年お亡くなりになったらし

いんです。
その時、このカカシが自分もついていくと言ったらしいんですよ。
雲の上までの道中をお守りしたいと。
奥さまが寂しがらないようにこのカカシの体は置いていく、
奥さまがいつか雲の上に行く時に、この体も燃やして一緒に行くと。
そう言ったそうなんです」

「じゃ・・自分から？」

「えぇ、カカシを贈った職人魔法士は古い友人だったそうです。
旦那様より少し早く亡くなったそうで、その方と再会したいともおっしゃられていたみたいで。
奥さまが魔法陣を供養されたらしいんです。
だから、カカシは傷ついて亡くなったわけじゃありません」

「・・・・私・・職人魔法士の魔法陣は、その人にしか直せないって分かってたけど・・
もし嵐で傷ついたんだとしたら・・やりきれなくて」

「魔法なんて、無力なものです。
失った命を蘇らせることなんて出来ません。
もしカカシが、嵐で亡くなっていたとしても
そうでもシーナが気に病むことはありません。」

トッドはシーナの頭を優しく撫でる。

「よく頑張りましたね。きっと奥さまもお喜びになると思います。
シーナは立派にやり遂げました。
もう誰も落ちこぼれだなんていいっこありません」

「うわぁ～～～ん」

「あぁあぁ、まったく」

シーナの初修理は大粒の涙で幕を閉じたのだった。

「お疲れさまでした、ココア飲みますか？」

「ありがとうございます！」

2人は夕食が済み、家で夜長を過ごしていた。

「今日は・・、シーナを少し羨ましく感じてしまいました。」

「え？」

「僕はきっと、シーナみたいに思いっきり泣いたりすること・・
きっと今でも出来ないと思うんです」

「どういう・・事ですか？」

「一生懸命、楽しそうに作業していた。
とっても羨ましかったんです。
僕は今もどこか、変な使命感とかプレッシャーとか
雑念持ちながら作業してますから。」

「・・・・」

「もう知ってるんでしょう？
僕が元職人だって」

「・・・実は」

「うっすらとね、酔った時話してたかもしれないし
ギルバートも何か話していたんだと思ったんです。
でも、職人の時なんてもっと嫌な気持ちでいたなぁ・・・
何にも楽しくなかった」

「・・・・今も・・ですか？」

「変わった気がする。」

シーナは目を丸くする。

「シーナといたら、いつかもっと純粋な気持ちで
楽しんで仕事が出来るんじゃないかって思い始めてきた。」

「ほんとですか！？」

「はい、本当です」

「・・・うぅ～～」

「ほんっと、よくまぁそんなに涙出ますね。ほら拭いて」

トッドは服の袖口で涙をぬぐう。

その後、涙交じりの他愛のない話は続き

ゆっくりと夜が更けていった。

第十二話　【古い傷】（前書き）

シーナのトッドへの想いがほぼ明確になってきます。
そしてここからトッドの心の傷に触れていく話が続きます。
少し雰囲気が重くなってきますが、２人を温かく見守ってくだされば幸いです。

第十二話　【古い傷】

「……」

シーナはこの日、不機嫌だった。

「私だって……出来るもん」

腕に巻かれたリボンを握り締める。

視線の先には、今日訪ねてきたリリィが

トッドの散髪を行っていた。

「ほんと、こんな増えるまで放っておくんだから」

「すいません」

「ね、トッド。最近ほんと顔色も良くなっちゃって」

リリィは鏡に映るトッドを見つめる。

「そうですか？」

「最初の頃は、顔も青白くて食も細かったし。ここに訪ねてくる人にしか口も聞かなかったこと、覚えてない？」

「そう…でしたね。」

「それもシーナちゃんのおかげね。
あんなに献身的な子が来てくれてよかったじゃない」

「……」

鏡に映るトッドの表情が曇る。

「ほぉら、またすぐそんな暗い顔する。
シーナちゃんだっていい加減怒るわよ？
まだ申し訳ないって思ってるの？」

「…そんなこと」

「ならそんな顔しないの。ほら、前髪切るわよ？あんたこんな長くなるまで放っといて」

「ん・・」

リリィはトッドの正面にまわり、前髪を切りはじめる。

二人の顔の距離が近づきシーナは息を呑む。

「薬はどう？ちゃんと効いてるの？」

「はい、少し強いものに変えてもらってから周期ものびて」

「副作用とか、大丈夫？」

「今のところ」

「そう、ならよかった。はい、終わったわよ」

「ありがとうございました、リリィさん。
おかげで頭がとても軽いです」

「そんなになるまで放っておくからよ。」

リリィは散髪道具を片付け、トッドから離れる。

リリィが近付いてくることに気付きシーナは慌てて窓を拭く。

「シーナちゃん」

「あっ、はい！」

シーナは慌てて振り返った。

「ごめんなさいね、トッドを独り占めしたみたいになっちゃって。
今はあなたがいるのにね。でしゃばっちゃったかしら」

「い…いいえ」

「それじゃあね、お邪魔しました」

リリィは微笑み、工房を後にした。

「リリィさん…大人っぽいなぁ。」

シーナは自分の髪を指でくるくると絡める。

「シーナ？」

トッドが顔を覗き込む。

「キャッ！」

「どうしたんですか？また難しい顔して」

シーナは必死に平静を装う。

「な…なんでもありません。」

「…本当に？」

「あーーえっと…トッド…・・・トッド！そういえばこの前、私の買ってきたロールケーキ！一本全部お客さんに振る舞ったでしょう？」

「え…！？」

「私…デザートにしようと思って、予算計算して買ってきたのに！トッドに言いましたよね…お客様に出す時には、２人の分は残しておいてくださいねって…」

「ご…ごめんなさいシーナ、僕…すっかり忘れてて…」

「食べ物の恨みって怖いんですよ？」

シーナはぼそりと呟いた。

「分かりました、何でもお願い聞きますから、ね？
どうかこのとおり、機嫌直してもらえませんか」

「じゃあ…、今度私と」

ピンポーン

「あ、お客様です、シーナ、すいません。出てもらえませんか」

「・・・・はぁ～い」

シーナはがっくりと肩を落とす。

そして玄関から今日のお客様を招き入れる。

「初めまして、アンジェラと申します。
ここに来たら、何でも修理してくれるとお聞きしてきたんです」

スラリとした体形の清楚な女性のアンジェラ。
どうやらこの街の人間ではなさそうだ。

「僕も未熟ですので・・何でもとはいきませんが、全力を尽くさせ

ていただきたいと思います。」

「あのぉ・・」

シーナはアンジェラの顔をじっと見つめて呟いた。

「もしかして・・プロバレリーナのアンジェラさん？」

「え・・えぇ、そうですけど」

「やっぱり！私大ファンなんです、あの・・黒い女！あの悪女と聖女の演じ分けはもう感動して」

「本当？ありがとう、とっても嬉しいわ」

シーナは目をキラキラと輝かせてアンジェラを見つめる。

「あの・・すいません、僕・・そういう事には疎くて・・・。
シーナ、僕にもわかるように紹介していただけますか？」

トッドは申し訳なさそうな表情でシーナに聞く。

「彼女は、バレエをしている人なら知らない人がいないくらい有名なバレリーナなんです。
黒い女っていう演目がとても有名で、一人二役でまったく性格の違う女性を演じ分けるんです。
それがもう、とっても素晴らしいんですよ？
でも・・最近ステージにも出なくなって・・引退したとも言われていませんしどうしたのかなって思ってたんです。」

「ずいぶん詳しいんですね、シーナ」
「だって、私も習ってたんですよ？バレエ」
「えぇ！？」
トッドは心底驚いた声をあげる。
「そんなに驚くことないじゃないですか！・・まぁ・・3か月でやめちゃいましたけど・・」
「なんだ、そうでしたか」
トッドは少し安心したような表情をみせた。
「それより、アンジェラさんの依頼ですよ、何を修理してほしいのか聞かなくちゃ」
「そうでした、すみませんアンジェラさん」
アンジェラはクスクスと笑っていた。
「2人とも、仲がよろしいんですね。息ぴったり」
「そ・・そうですか？」
シーナは嬉しそうにもじもじと髪をいじる。
「あの、今日はこれを直してほしくてここに来たんです」

「これ、トゥシューズですよね。」

「えぇ、リボンが切れているの。
この靴をずっと履いて踊り続けてきた。だけど…たった一度の失敗…あの日からどうしても踊れなくなった。」

アンジェラはトゥシューズを撫でながら淋しそうに語る。

「大好きだった先生に…最後に見せる演技をね…私、大失敗しちゃったの。本番でリボンが切れて…転んで、大失敗。
先生は末期の病気で、先生に見せる最後の舞台だったのに…私、何も言えずに…先生に挨拶も出来ず本番終わって逃げ帰ったのよ。
あれから何度舞台に上がっても…だめ。踊れないのよ」

沈黙が流れる。

トッドは神妙な顔つきで口を開く。

「僕には、バレエの事はよく分かりませんけれどトゥシューズを綺麗にすれば忘れられるなんて思ってませんよね」

「……」

トッドの口調はどこかいつもより強かった。

「僕の修理は…傷を無にかえす事です。
でも、そうしたら貴方が踊れるようになるとは僕には思えないんです…

貴方が傷を見ないふりしたいだけに思えるんです…」

アンジェラは唇をかみしめる。

「それでも…踊りたいの、やってみなくちゃ分からないでしょう？」

「…、それもそうですね。
余計なこと聞いてすみません。
じゃあ、この靴お預かりしますね。
これなら1時間程度で直せます。」

トッドはあっさり靴を受け取り工房へ向かった。

部屋を静寂が包んで約1時間…。

トッドが靴を持って戻ってきた。

「ご要望通りの、新品同様のトゥシューズです。」

アンジェラは新品同様に生まれ変わったトゥシューズを眺める。

しかし受け取ろうとはしない。

「これで…踊れますよね」

「……、無理よ、無理だわ」

アンジェラの目から涙がこぼれる。

「あなたの言うとおり…私は傷から目を逸らしたかっただけ…。そうすれば、また踊れるようになれるって…だけど」

トッドは優しく微笑んだ。

「よかった、気付いてくれて」

トッドはズボンのポケットからクロスを取出し、トゥシューズを包む。

再びクロスをトゥシューズから離すと、トゥシューズは元の傷ついた靴に戻っていた。

「靴が、元に戻った…」

シーナは目を丸くする。

「すみません、嘘ついてしまいました。仮修理の段階だったんです。新品の幻影を重ねた段階でお見せしただけだったんです。」

「……よかった」

アンジェラはトゥシューズを抱きしめる。

「貴方の先生と過ごした時間も、その靴に詰まっているんでしょう？
貴方が目を逸らせばせっかくの先生との思い出まで
逸らしてしまうことになる。そんな淋しいことしないほうがいいで
すよ。」

トッドは優しく諭すように話す。

アンジェラは涙ながらに頷きながらじっと聞いていた。

「……私、もう一度頑張ってみます。
この靴も、自分で縫ってもう一度この靴で踊る」

「頑張ってくださいね」

アンジェラは、そのままの姿のトゥシューズを持ち帰り、工房を去
っていった。

その日の夜。
2人はいつものようにコーヒー、紅茶を飲みながら
リビングで秋の夜長を過ごしていた。

「珍しいですね、あんな強い口調になったトッド初めてみました。」

「…らしくありませんでしたよね。
我ながら大人気なかったです。
でも……」

「？」

「なんだか…まるで自分を見てるようで。
僕は未だに自分の傷からずっと目を逸らしているから…
すっごく苦しいんです。
だから同じ思いをしてほしくなかった。それだけです。」

トッドは苦い表情で呟いた。

「少し…。今もどうすれば克服出来るのか分からずに、
もがけばもがく程…胸に鉛が落ちては溜まるような感覚なんです。
でも彼女は僕とは違う。彼女は、自分で傷と向き合うすべを知っていたのに、
見ないふりをしていた、だから…ああやって偉そうに諭してしまった。
まったく何様でしょうね、僕は。」

トッドは自嘲気味に笑う。

「誰でも自分の傷と簡単に向き合えるわけないです、
それにトッドは…アンジェラさんに自分の様に苦しんでほしくない
思いからの行動だったじゃないですか。…自分を責める必要なんて
……」

「…なんだか暗くなっちゃいましたね、そろそろ寝ましょうか……
…あれ…」

トッドは椅子から立ち上がると、軽くふらつきテーブルに手をついた。

「トッド？」

「いや…少し目眩が……、変だな……」

「トッド、しっかりしてくださいトッド」

シーナの声が遠くなる。

トッドにはシーナが叫んでるように見えるだけで、何を言っているか聞き取れなくなっていた。

そのままトッドはゆっくり意識を手放した。

第十三話　【真実】（前書き）

今回、トッドがシーナに今まで隠してきた真実をすべて話します。
私が一番書きたかった話です。
どうか2人を見守ってあげてください

第十三話　【真実】

目が覚めると、見慣れた天井が視界に広がる。
まだ意識がしっかり覚醒されず
ぼんやり窓に目をやるとやわらかく日が差し込み
夜が明けていることがわかる。
頭に鈍痛が走り、腕がしびれる。

「あーぁ……」

天井を見つめながら、思わずため息が漏れる。

「お目覚めかい？」

一番聞きたくない声が部屋の扉の方から聞こえた。
耳を塞ぎたい気持ちだった。

「先生…わざわざ家まで？」

「君のアシスタントから急患と電話がきてねぇ。」

シーナだ。
昨日倒れたのを見て、さぞ驚かせてしまっただろう。

でも連絡先をどうして。

さしずめ、リリィさん辺りに連絡先を聞いたのだろう、あの人の前でも一度ぶっ倒れている。

「気分はどうかな？」

先生が顔を頭上から覗き込む。

「頭が痛くて…手に少し痺れが」

「副作用だね、やっぱり薬が強すぎたみたいだ。」

聞きたくなかった。

きっと明日にでも薬が戻される。

せっかく周期ものびてきていたのに。

でもそれより聞きたくない話がまだある。

まずい、苛々してきているのが分かる。

頭の鈍痛の欝陶しさが拍車をかける。

「君の場合、薬を変えるより効果的な治療は他にある。

君の疾患が、他の元職人より症状が出やすいのは精神的な原因が大きいんだ。

トッド…君がまだ自分の生きていく道に迷ってるから、いつも自分に負い目を感じてるからなんだよ」

「……」

「君は修理屋として安定したペースで魔法を使ってる。
魔法士としての生き方に反しない生き方をしているなら本来症状は軽い腕の震えで済むはずなんだ。
けれど君はまだ職人だった頃の過去を断ち切れずに自分を受け入れていない。それが症状に拍車をかけるんだよ。
戻りたい戻りたいという思いが強すぎるんだ。」

「もしそうだとしても、僕には…どうにもできないんです」

「…！」

決壊した。
感情が高ぶって止まらない。
だから苦手なんだ、この人が。

「この家に来た日から毎日…1日だって忘れられなかった。
毎日毎日別のこと考えて、忘れようとしたって……僕は人を見るたび思い出すんです！
存在ごと見捨てられたあの孤独な瞬間を…。
職人に戻れたらみんなが僕を見てくれる、思い出してくれるまた愛して」

「それは」

「そんなの本当に愛されていないことくらい知っています！……それでもあの時の苦しさに比べたら」

「君はいまこんなに生活が穏やかじゃないか、どうしてあの時に戻ろうとする」

「…まだ心の何処かで、僕は人を疑ってるんだと思います…だっておかしいじゃないですか。
同じ人間なのに僕に対してこんな暖かく迎えてくれるなんて…。
こんなに接し方が変わるなんて。まだ魔法士だからよかったんですかね…　。
これで魔法も残ってなかったら誰も僕なんて」

「……」

「……黙らずに、言ってください。君は馬鹿だと。
こんなに…こんなに暖かい場所にいられるのに、それを信じられない僕は大馬鹿者だと……っ…」

堪えていた涙までついにこぼれた。
いっそ殺してほしいくらいに惨めだった。

「言わないさ…君は痛いほど分かってる。」

「……」

「目眩とふらつきがしばらく続くだろうから…2～3日は安静にしておくんだよ」

先生はそう言い残し、少し弱くなった薬を置いて部屋を出ていった。

それからしばらく放心状態だった。
いつまでも続く頭の鈍痛で眠るにも眠れない。

「トッド…」

シーナの声が聞こえた。

声の聞こえるほうへ首を傾けると
部屋の戸に隠れてシーナが顔だけ出して立っていた。
まるで自分を怖がっているように見える表情で。

「…シーナ？」

彼女がおずおずと近づく。

「…大丈夫ですか？」

「えぇ、平気です。まだ目眩がひどくてしばらく安静にとは言われましたけど。
驚かせてしまってすみませんでした。
医者を呼んでくれたんですね、ありがとうございました」

「私じゃありません…」

その時は、シーナの言うことがよく分からなかった。
「トッドが倒れてから…私、どうしたらいいのか分からなくて。
すぐに救急車…呼ぼうとしたんです、でも…
腕が震えてたから普通の病院じゃだめかと思って…だから……」
「リリィさんに…？」
シーナはいつもより静かに泣き出した。
「リリィさん…トッドの掛かり付けのお医者様の連絡先も、
薬の副作用だって事も全部知ってました……、リリィさんがいなかったら私トッドを助けられなかった」
「…リリィさんには、シーナが来る前に、散々迷惑をかけてしまっていましたから。
それだけの事で」
「違うんです」
ぼんやりとした意識の中で、そういえばシーナの笑った顔を最近あんまり見れなくなった事に気がついた。
よく難しい表情をするようになり、泣くことも増えた。
「私…リリィさんに嫉妬していたんです。
私よりずっと前からトッドの事を知ってるリリィさんが…
トッドの事、助けられるリリィさんに。

恥ずかしかったんです、こんなの…トッドの右腕失格です。
一番にトッドのこと考えないといけないのに私はリリィさんに対して悔しがってた。
このままリリィさんがトッドを独り占めしちゃうんじゃないかって」

リリィさんは…シーナが来てからある言葉をよく言うようになっていた。

私が先に僕に出会っていなかったらシーナちゃんが悩むことなかったのかもね…と。

最初は意味がよく分からなかったけど、今繋がった。

シーナがリリィさんに嫉妬してる…？

リリィさんはただ…身寄りのない僕を、ギルバートの友人であることで…面倒をみてくれていただけで…

病院の連絡先を知っていたのだって、リリィさんの前で同じように倒れて、魔法士専門の医者をリリィさんがたまたま知ってくれていたから…

それだけなのに。

「どうしてなんですか…？」

「え…？」

シーナは目を丸くしてこちらを見つめた。
自分はいまおかしな事を言っているんだろう。

「シーナも…リリィさんも…この街の人たちも…どうしてそんなに僕に優しくするんですか？
僕はもう…職人でも何でも」

「そんな事、どうして関係あるんですか」

「僕の生まれた国は…職人として生きることが全てだった。そう育てられて、そして捨てられた。全てに……」

「…トッド」

「ごめんなさいシーナ…」

もう言ってしまう。
止められなかった。

「僕は…シーナに出会ってからずっと…君の好意を信じることから逃げていたんです。」

シーナはただ泣いていた。

「僕が職人を辞めたあの日のこと…全部話します。そこに椅子がありますから、かけて聞いてください。」

シーナは静かに座った。

頭が痛い…
胸も高鳴る。

自分で話すのは今が初めてだった。

「僕は…職人魔法士を育てる学校にたった1人で勉強を続けていました。
僕の力は、廃材を全て新しくして新たな産物を創造する力でした。
廃材を新しくすることは出来てもそこから新たな産物を創造する力は重宝されました。
いくら壊れたって、それをまた元に戻す上に、新たに生成出来ることはとても素晴らしいと。
その力を磨くために先生から受けた依頼される産物を作り続ける毎日を送っていました。
そして、ギルバートに出会って学校の外の世界を初めて知った。そこで僕は…自分の運命を変える書物に出会ったんです」

「本…ですか」

「職人の産物を軍事から守る契約印の魔法について書かれた本を見つけたんです…。
その契約者リストには…名だたる職人の名前ばかり記されていました。
同じ職人なら知らない者はいないだろうという位有名な職人ばかりだった。
だけど不思議と、学校を卒業し職人になった者の名前が…1つとし

てなかったんです。」

「どういう…事なんですか？」

「その時は僕にも何も分かりませんでした。
でも、軍事から産物守るという事に僕はひかれて、街の本屋で購入したんです。
ギルバートに頼んで珍しい本屋から。」

「契約って…？」

「自分の産物が…軍事に1つでも使用されたその瞬間に、自分の職人としての力が永遠に封印され、
軍事に利用されようとしていた産物が全て使い物にならなくなるというものでした。
職人としての力を犠牲にして産物を守る。
それが軍事から…自分の産物を守る唯一の方法だったんです」

「……」

「僕は学校を信じていました。
その本はしばらく使わずに隠しておきました。
そしてギルバートは探検隊に入り僕は再び1人なりました。
けれど…僕に近付いてきた1人の男が現われたんです。名前はバート」

「バート…」

「学校内では、初めて出来た友達でした。
とても親しみやすい少年でした、優しくて…とても信頼できた。
嬉しかったんです、初めて学校が楽しくなった瞬間でした、気味が悪くても先生や周りの大人も優しく接してくれた。
そんな時、僕の父親が亡くなった。」

「お父様が？」

「僕の母は、僕を産んですぐ病で亡くなりました。
父は魔法士で画家でした。いつかお話したでしょう、
四季の絵を描く画家の話…あれ、僕の父なんです」

「え…」

「父が死んだのは僕が１２の時でした。
その時には僕は学校の寮にいましたから…父の死に目には会えなかった。
だけど……学校の先生や生徒は僕の父を哀れな職人と罵った。
僕はそうならないようにと何度も何度も僕に言ったんです。
それでおかしいと思い、僕は契約印に手を伸ばした。」

「結果は…」

「アウトでした。
僕が学校で作ったものは裏で全て軍事に利用されていた…
バートの妹、家族、友達に渡すためのオモチャの核部分も全部軍事に……

誰も本当に僕を愛してくれている人なんていなかった。
痛みはなかった。
ただ絶望だけを僕におとし契約は完了した。
僕は自分の産物を守った。
父が罵られた理由もやっと分かった。
彼の産物は軍事には使えないから・・・
その証拠に、契約者リストの元職人の産物は
一度軍事に利用されたことのある職人だったから。
あの本は・・・学校が隠していたものだった。」

「……」

「僕は何も作れない体になった。その日から僕は…誰にも話し掛けてもらえずに目も合わせてもらえずに、
まるで死んだように…僕をみようとはしなかった。
僕の存在を消したんです。そして数日がたってから…ギルバートの友人だった
リリィさんがこの事を知って僕をこの町へ連れてきてくれた。
あぁ、死んだかと思ってた。誰も僕に気付いてくれなかったから。
リリィさんは僕に仕事と家をくれた…そのおかげで僕は今に至るんです。
学校はその事がばれて廃校になったそうです。」

「……」

「これが…僕のすべてです。僕は一度死んだような経験をした。
それがまだ僕を縛っているんです…僕を…何も信じられなくしたあの経験が…」

全部話した。

意識が遠くなって…僕は再び意識を手放した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5149z/

【優しい魔法の使い方】

2011年12月20日19時54分発行